

美里町人口ビジョン

心豊かな人材を育み、地域産業が発展し、
にぎわいのある、生き生きとした暮らしがで
きるまち

平成28年3月
美 里 町

美里町人口ビジョン

目次

1	人口ビジョンの作成について	1
2	人口ビジョンとは	1
3	人口ビジョンの期間について	1
4	人口の現状分析	1
(1)	人口動向分析	1
ア	総人口の推移と将来推計	1
イ	国勢調査における本町の人口推移と国による将来人口推計	1
(2)	出生数・死亡数及び転入数・転出数の推移	2
ア	出生数と死亡数	3
イ	転入数と転出数	3
ウ	自然増減数と社会増減数	4
(3)	性別・年代別の人口移動の状況	5
ア	転入者の状況	5
イ	転出者の状況	6
ウ	転入数と転出数から発生する影響	6
(4)	移動先、旧居住地別の人口移動の状況	7
ア	転出の状況	7
イ	転入の状況	8
ウ	異動先から見た転入・転出の影響	9
(5)	県内市町村間における人口移動	10
ア	転出の状況	10
イ	転入の状況	10
ウ	県内市町村との転入・転出の状況	11
エ	県内市町村との転入・転出の状況（男女別）	12
(6)	美里町と大崎市における人口移動の状況	13
ア	大崎市への転入・転出の年代別状況	13
イ	大崎市への転入・転出の年代別状況（男女別）	14
(7)	美里町と仙台市における人口移動の状況	14
ア	仙台市の区ごとにおける移動の状況（転出）	14
イ	仙台市の区ごとにおける移動の状況（転入）	16
ウ	仙台市の区ごとの詳細	17
(8)	平成26年における主な人口移動の内容	20
ア	主な転出	20
イ	主な転入	20

(9) 女性人口の動き	21
ア 女性人口の推移	21
イ 他の町との比較	22
ウ 女性人口と子どもの数	23
(10) 就業者の動きについて	25
ア 美里町の住民の就業場所	25
イ 美里町内で就業する人の居住地	27
ウ 就業者の流出・流入の状況	28
エ 産業別の就業場所	29
オ 就業スタイルの男女別比較	30
カ 業種別による就業場所	30
5 美里町の将来推計人口と目標人口について	31
(1) 国による推計人口	31
(2) 町による推計人口及び目標人口	32
6 今後の課題、展望及び方向性	34

1 人口ビジョンの作成について

町は、今後のまちづくりの基本指針である「美里町総合計画・美里町総合戦略」の策定にあたり、これまでの総合計画の実施における評価を行うとともに、今後の町の将来を設計したところです。

さらに、地方における最大の課題である「人口減少」に真摯に向き合うため、町の人口動態を明らかにする必要があることから人口の現状、将来の展望を行う人口ビジョンを作成するものです。

2 人口ビジョンとは

各地方公共団体における人口の現状を分析し、人口に関する地域住民の認識を共有し、今後目指すべき将来の方向と人口の将来展望を提示するものです。

3 人口ビジョンの期間について

人口ビジョンの期間については、美里町総合計画・美里町総合戦略における将来目標の実現を目指し設定した2040年（平成52年）までとする。

4 人口の現状分析

(1) 人口動向分析

ア 総人口の推移と将来推計

美里町の人口推移は、次のとおりとなっています。（図1）

図1¹



これまでの人口推移をみると、昭和60年から人口は減り続けています。小牛田地域は、過去の住宅政策による人口変化がありましたが、南郷地域は人口増加の要素は過去になく、人口減少の状態が長期間続いています。

イ 国勢調査における本町の人口推移と国による将来人口推計

これまでの人口推移と国が示す本町の将来人口推計を示します。（図2）

¹ 国勢調査による数値。

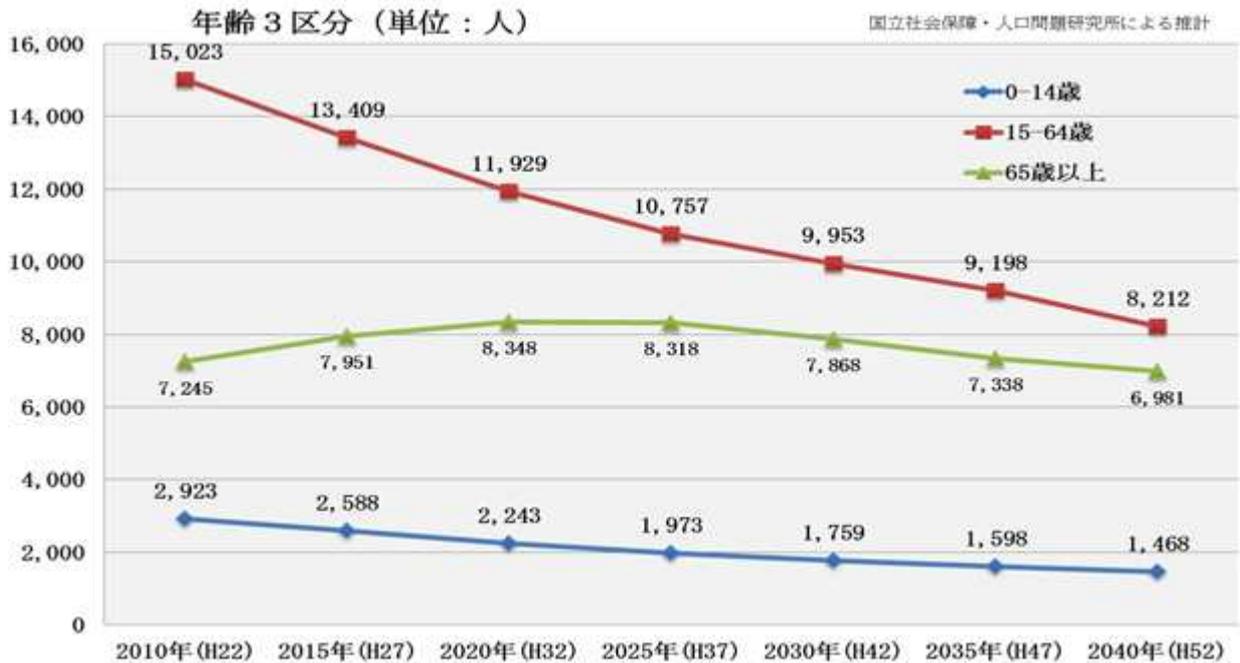
図 2²



図 2 では、平成 22 年（2010 年）から急激な人口減少のカーブが見られ、これから人口減少が、より深刻化することが推計されています。

平成 22 年の実績と国が示す推計の年齢 3 区分（0～14 歳、15 歳～64 歳及び 65 歳以上）の人口を表します。（図 3）

図 3³



(2) 出生数・死亡数及び転入数・転出数の推移

² 国勢調査による実績と国の機関による推計値を組み合わせたもの

³ 国勢調査による実績と国の機関による推計値を組み合わせたもの

ア 出生数と死亡数

出生数と死亡数の推移を次に示します。(図4)

図4⁴



死亡数は徐々に増え続け、出生数は下がり続けていることが分かります。自然減として人口減少に大きな影響を及ぼします。

イ 転入数と転出数

転入数と転出数の推移を示します。(図5)

⁴住民基本台帳による数値

図 5⁵



転出数は徐々に減り、平成 2 4 年から転入数が転出数を上回り、社会増の状況が続いていることが分かります。

ウ 自然増減数と社会増減数

人口の自然増減数と社会増減数の推移を示します。(図 6)

図 6⁶



平成 2 1 年及び平成 2 4 年以降に社会増が起きていることが分かります。しかし、自然減がますます

⁵ 住民基本台帳による数値

⁶ 住民基本台帳による数値

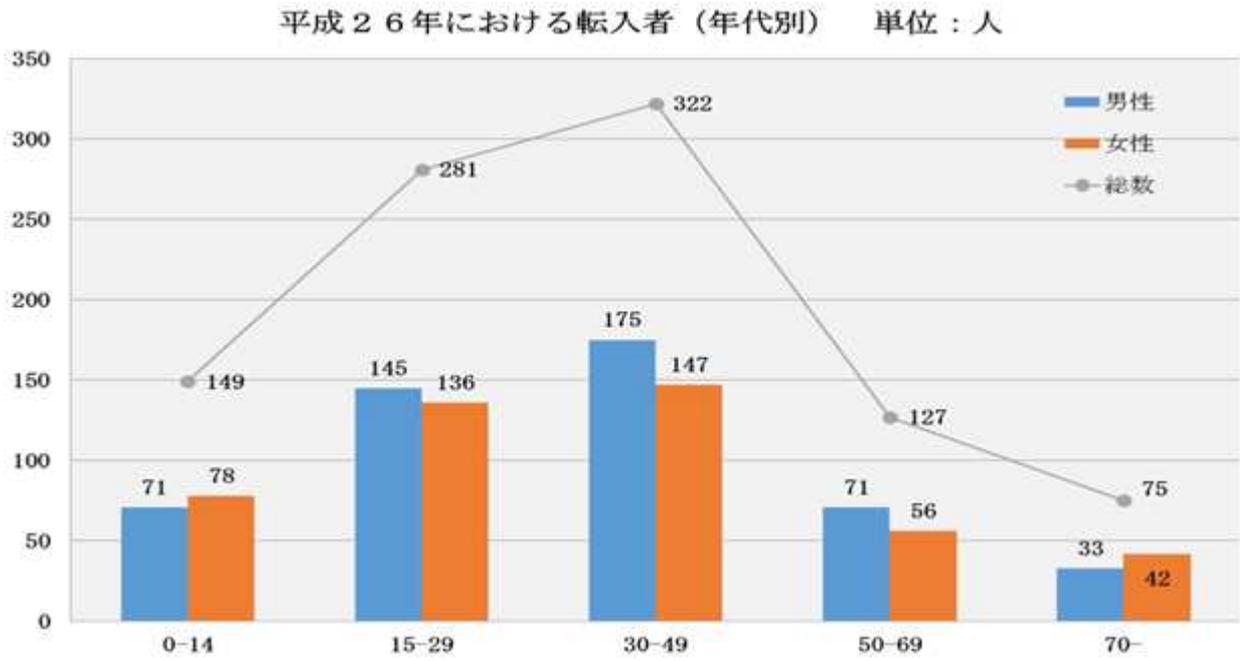
ず悪化していることも分かります。社会的、自然的な人口の動向を踏まえると、常に人口は減っていることが分かります。よって、移住定住策とともに少子化対策、高齢者福祉、地元への愛着づくりなど多様な取組が人口の増加、人口減少の緩和に効果をもたらすと言えます。

(3) 性別・年代別の人口移動の状況

性別及び年代別の転入と転出の状況を示します。(図7、図8)

ア 転入者の状況

図7⁷

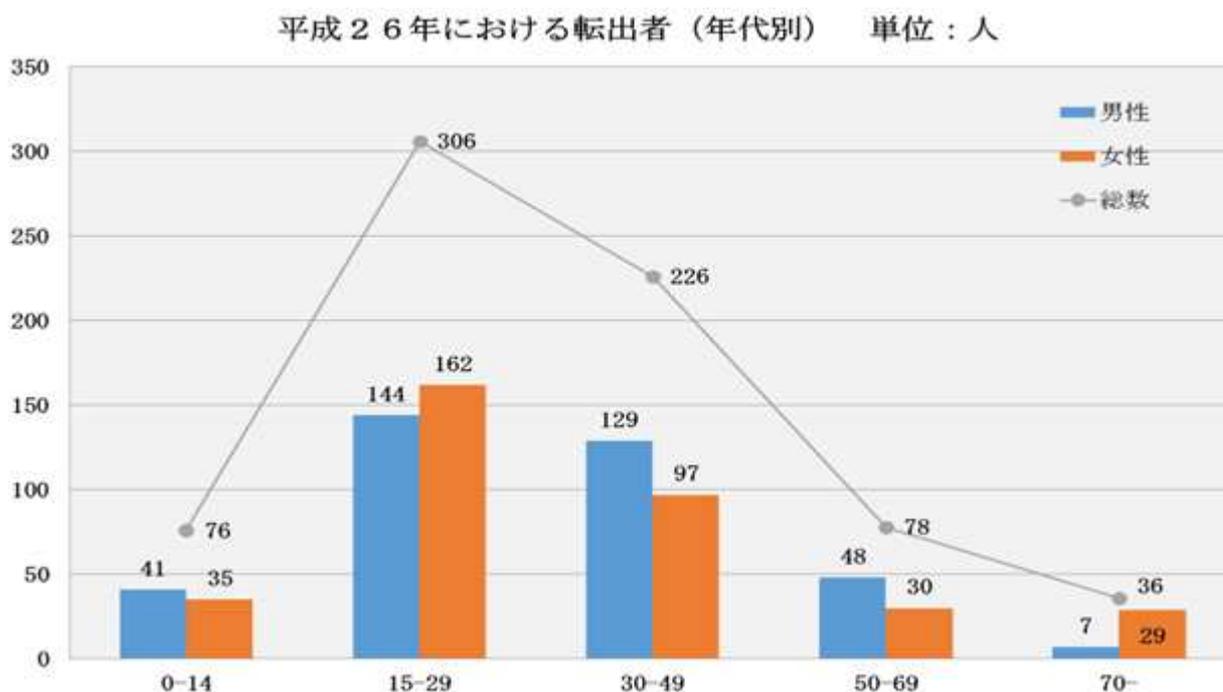


転入者全体の33.6%が30歳から49歳までの年代が占めています。

⁷ 図7から図29までは住民基本台帳を基に国から提供された数値を用いて作成しています。

イ 転出者の状況

図 8



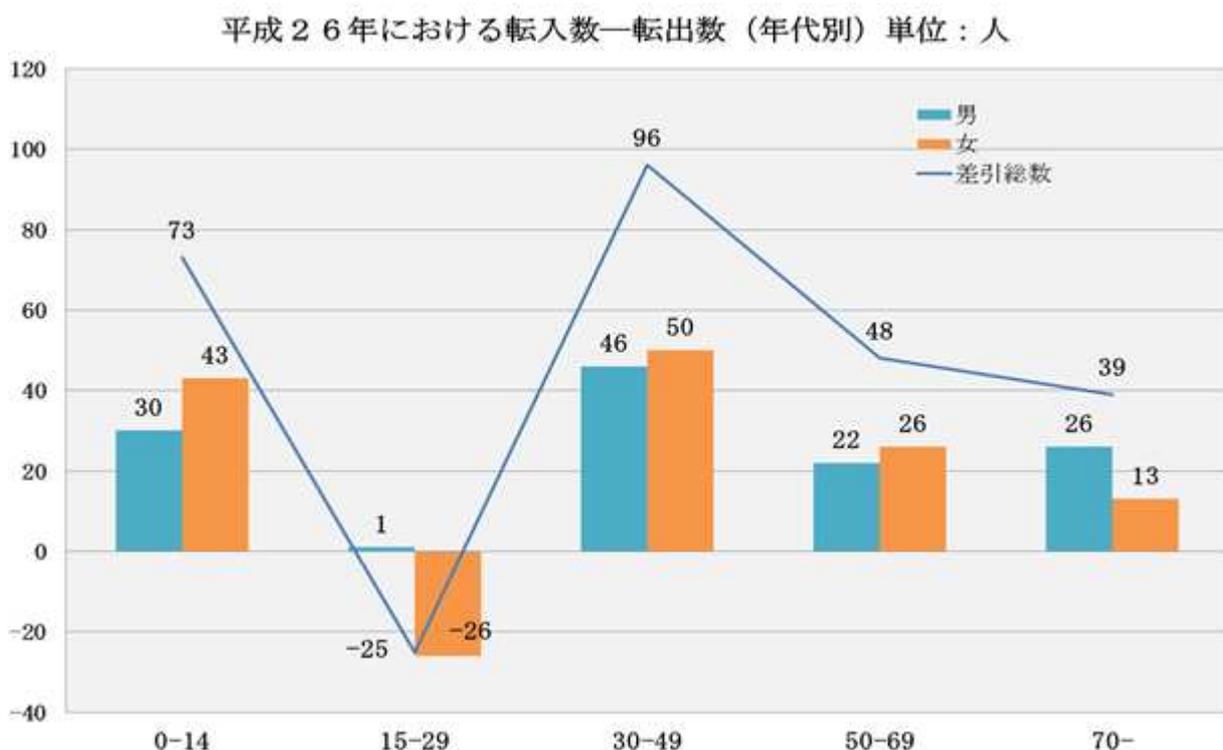
転出者全体の 42.4% を 15 歳から 29 歳までの年代が占めています。また、その世代の女性が町内から転出することは出生数の減少にも影響を与えます。

転出者に占める割合は 15 歳から 29 歳までの年代が一番高く、転入者に占める割合は 30 歳から 49 歳までの年代が一番高くなっています。

ウ 転入数と転出数から発生する影響

次に転入数から転出数を差し引いた数を男女別・年代別に示します。(図 9)

図 9



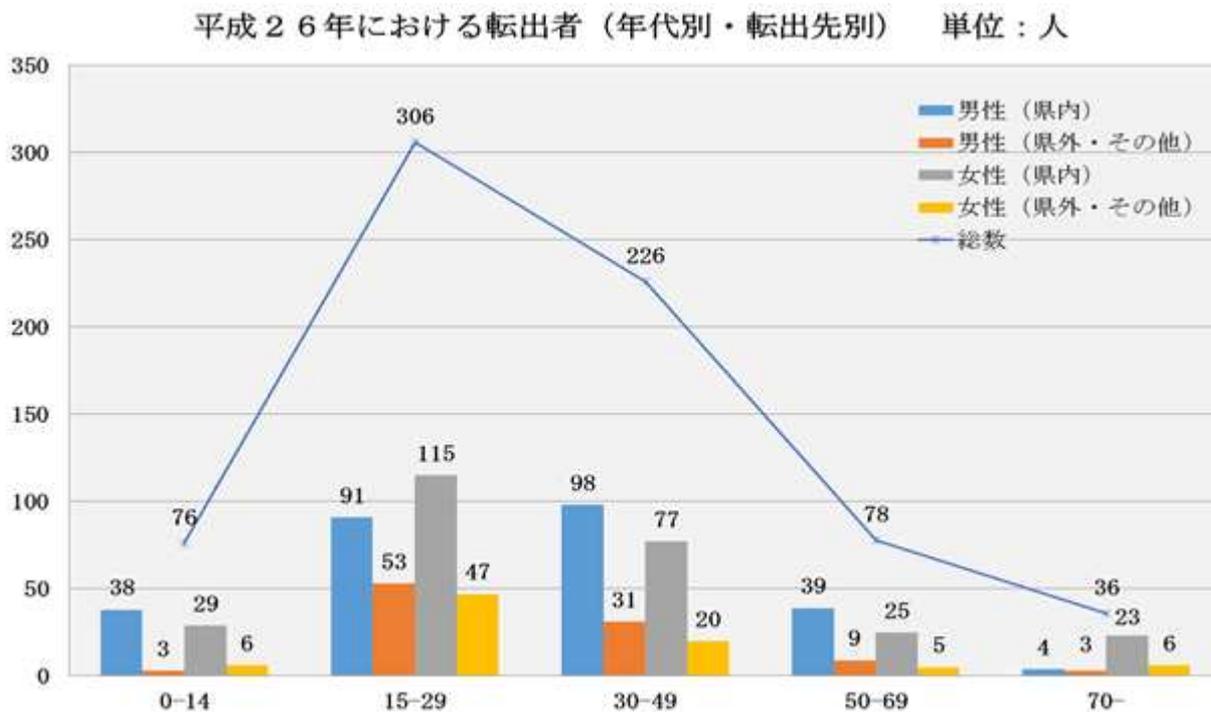
平成 26 年は、15 歳から 29 歳までの年代以外のすべての年代で、転入数が転出数を上回っていることがわかります。15 歳から 29 歳までの学生を含む若者が転出超過になっていることを真摯に受け止めることは必要です。

4) 移動先、旧居住地別の人口移動の状況

ア 転出の状況

はじめに人口の流出の状況を転出者の転出先をもとに見てみます。(図10)

図10



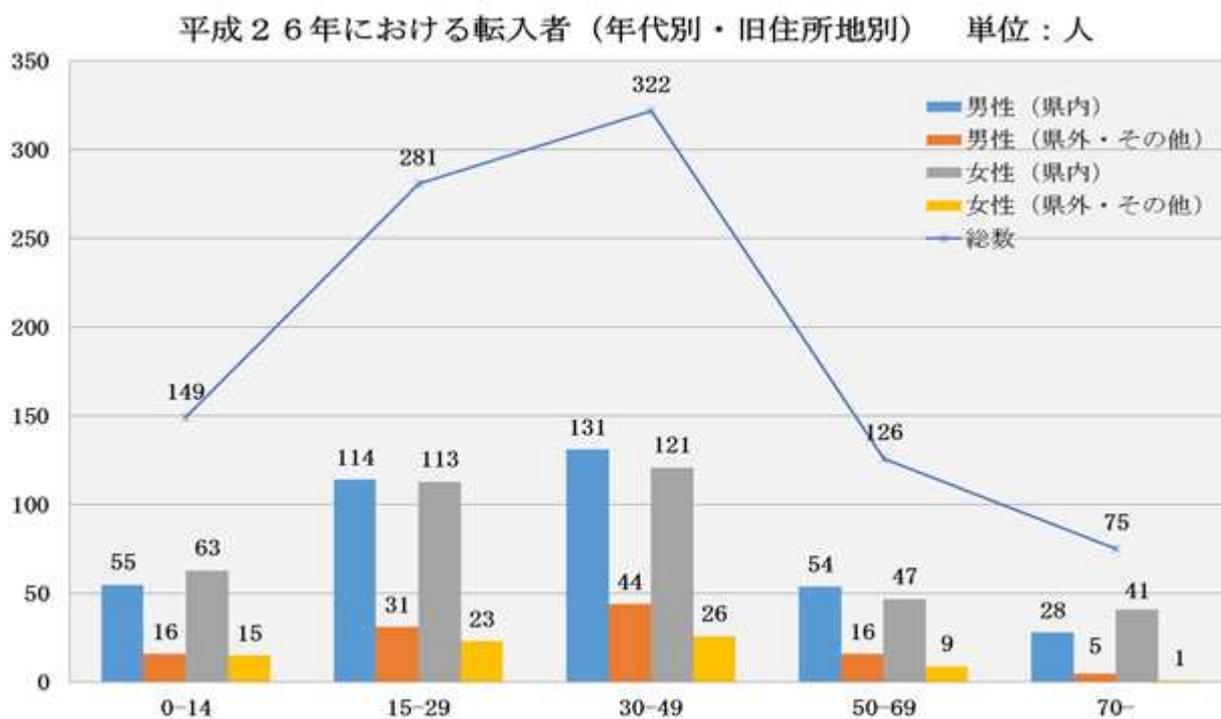
転出者が一番多い15歳から29歳までの年代では、女性の県内転出が多いことが分かります。また、転出者全体の74.7%が県内転出であり、県外転出は25.3%です。

15歳から29歳までの年代だけを見ると、県内転出は67.3%であり、県外転出は32.7%となり、この年代の県外転出の割合が高いことから、全体から見ると県外転出の傾向にあると言えます。

イ 転入の状況

次に、転入者を転入前の所在地（県内・県外）別及び男女別に示します。（図 1 1）

図 1 1

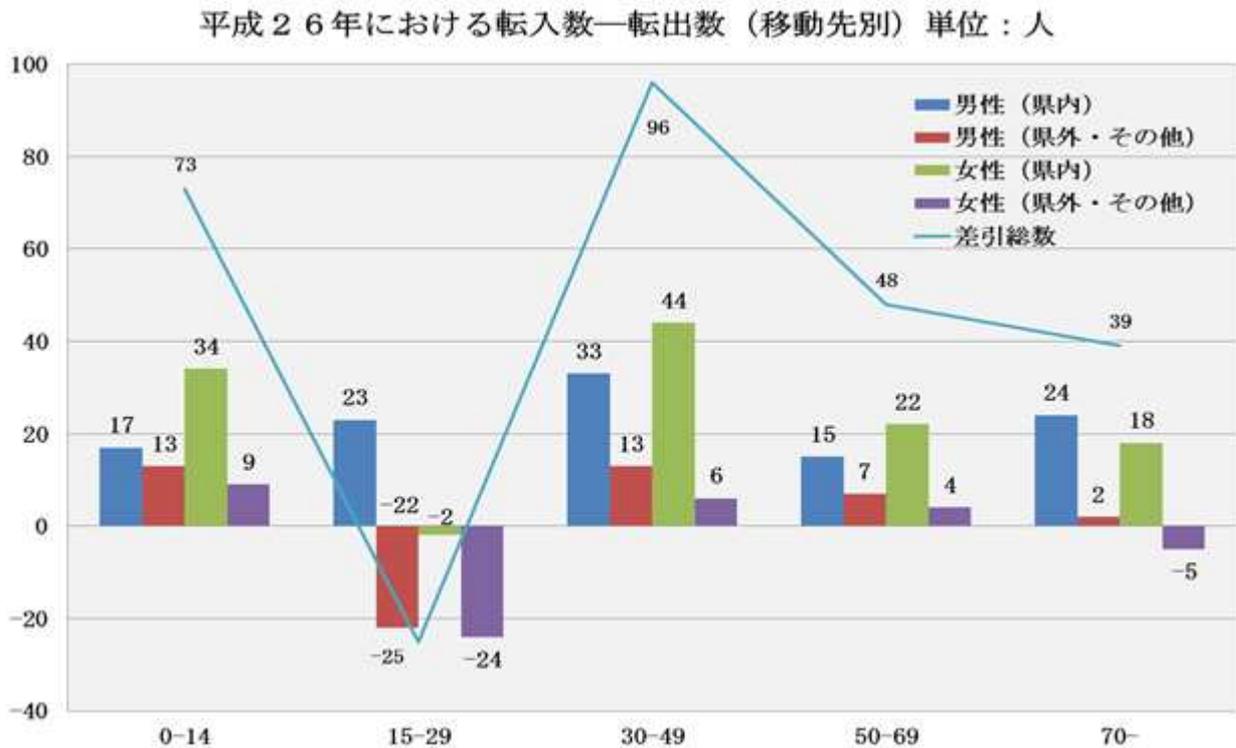


転入者の多くを占めている 1 5 歳から 2 9 歳まで及び 3 0 歳から 4 9 歳までを見ると、男女の差はほとんど見られず、いずれも県内の他の地域からの転入が目立ちます。県外・その他の地域からの転入に目を向けると、1 5 歳から 2 9 歳までの年代にあっては 2 8 1 人中 5 4 人（1 9 . 2 %）、3 0 歳から 4 9 歳までの年代にあっては 3 2 2 人中 7 0 人（2 1 . 7 %）、5 0 歳から 6 9 歳までの年代は 1 2 6 人中 2 5 人（1 9 . 8 %）と、どの年代においても U I J ターンの特異な地域とはなっていません。

ウ 異動先から見た転入・転出の影響

次に転入前の所在地（県内・県外）別、年代別及び男女別による転入転出の差引について示します。（図12）

図12



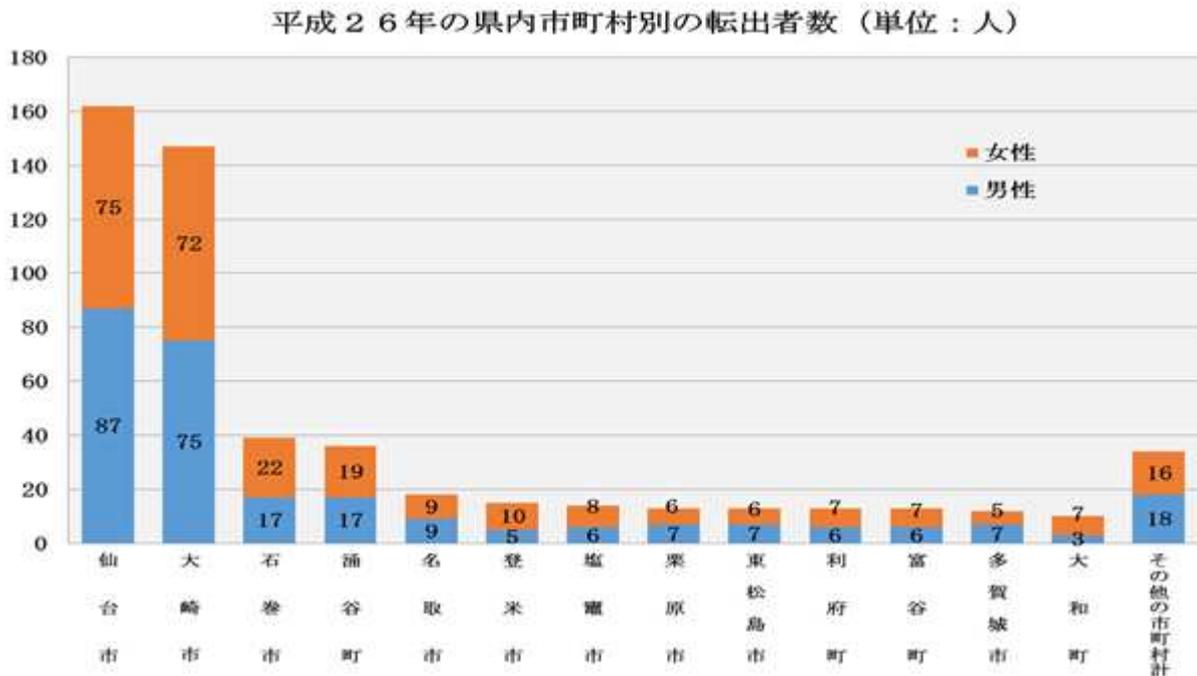
ほとんどの性別、年代別、転入前の地域別で増加を生んでいることが分かります。しかし、15歳から29歳までの年代において、県外からの転入数を県外への転出数が大きく上回り、男性で25人、女性で24人が他の都道府県に流出していることが分かります。

(5) 県内市町村間における人口移動

ア 転出の状況

人口の流出状況を把握するため、宮城県内の市町村への転出の状況を見てみます。初めに本町からの転出先別に見てみます。(図13)

図13

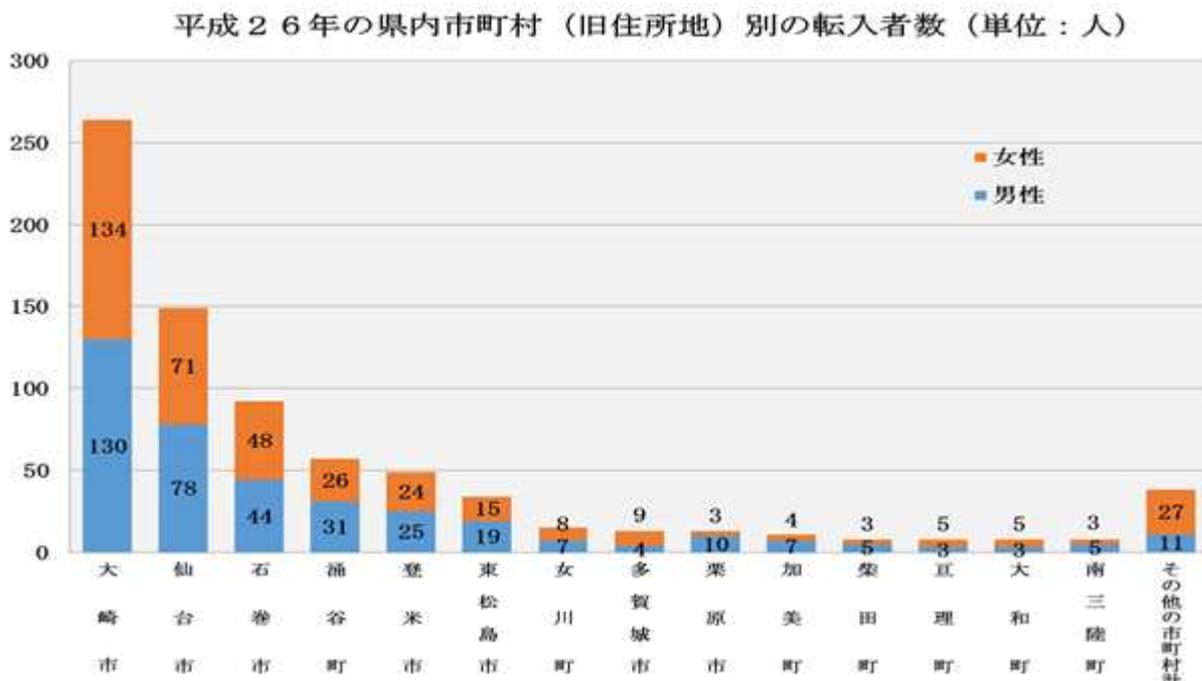


仙台市、大崎市への転出数が他の地域に比べて、特に多いことが分かります。また、女性と男性の差についても大きな差は見られません。

イ 転入の状況

本町への転入の状況を同じく見てみます。(図14)

図14



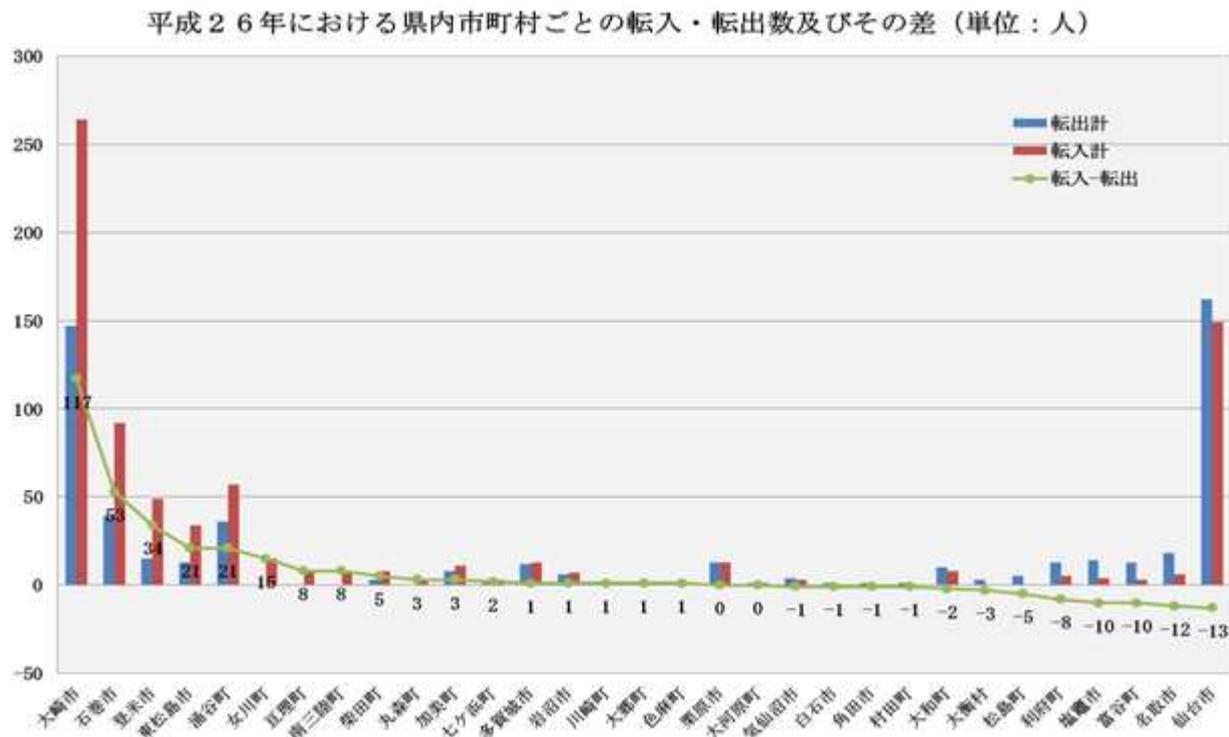
転入については、仙台市と大崎市の順が逆になり、大崎市からの転入が目立ちます。石巻市からの

転入者数の多さが目立ち、平成23年3月の東日本大震災により、自宅等の再建の場として本町を選択していると考えられます。石巻市、東松島市、女川町、多賀城市、亶理町、南三陸町の県内沿岸部市町が上位に位置していることから、その可能性は高いと思われます。

ウ 県内市町村との転入・転出の状況

県内市町村毎の転入数・転出数、さらにその差を示しました。(図15)

図15



転入超過の相手先市町は17市町であり、その中でも10人以上の転入超過の相手先市町は6市町となっています。その6市町は大崎市(117人)、石巻市(53人)、登米市(34人)、東松島市(21人)、涌谷町(21人)及び女川町(15人)となり、そのうち沿岸部に位置する市町は3市町で、その転入超過数は89人となっています。

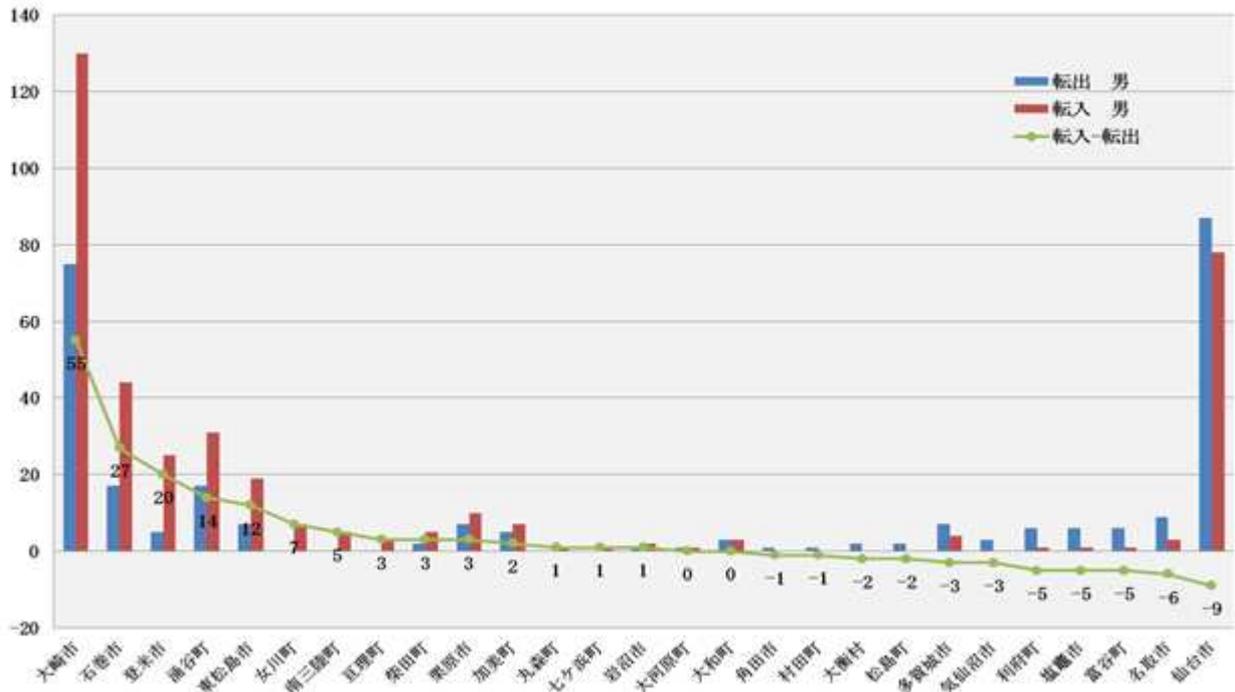
一方、転出超過の相手先市町は、仙台市(13人)をはじめとして、名取市(12人)、富谷町(10人)、塩釜市(10人)、利府町(8人)と続いています。

工 県内市町村との転入・転出の状況（男女別）

次に男性、女性の内容をそれぞれ見てみます。（図16）

図16

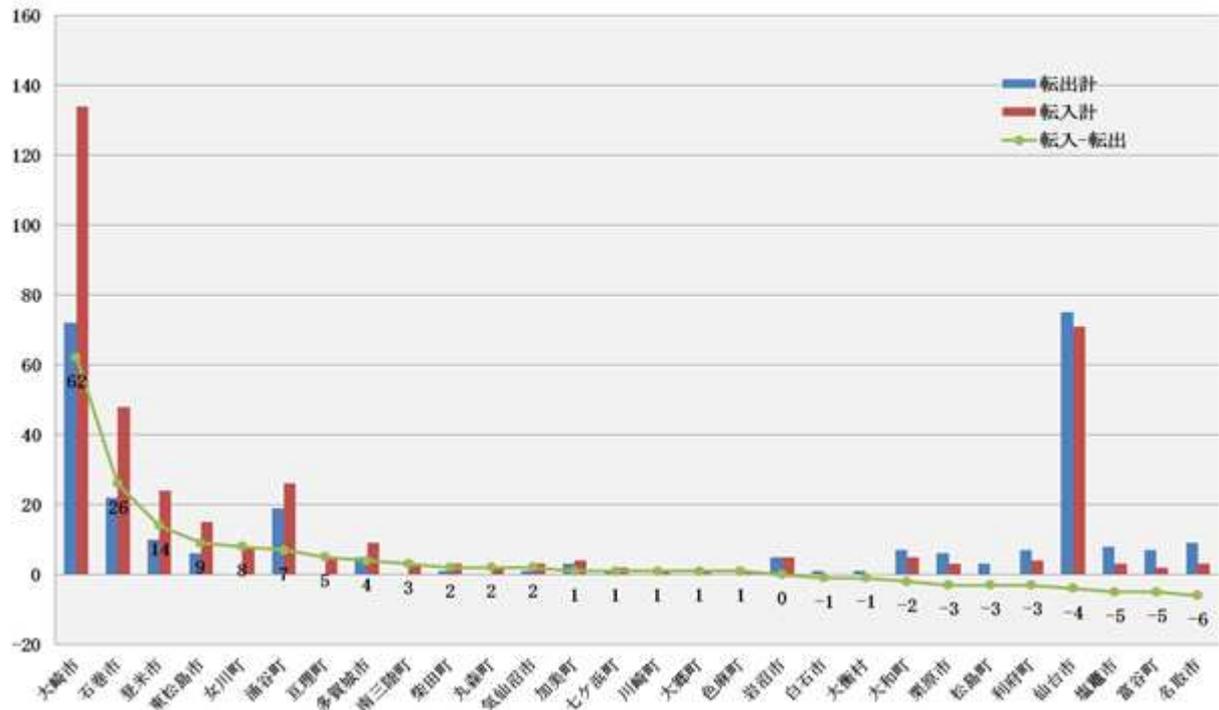
平成26年における県内市町村ごとの転入・転出数及びその差（男）（単位：人）



男性は全体の傾向とほぼ同じ内容となり、転入超過は大崎市、石巻市、登米市等であり、転出超過は仙台市、名取市、富谷町等となっています。次に女性の状況を見てみます。（図17）

図17

平成26年における県内市町村ごとの転入・転出数及びその差（女）（単位：人）



女性が、全体及び男性の傾向と違う点は転出超過先の最大の相手市町が名取市であり、次いで富谷町、塩釜市と続く点です。女性の場合、就業地に伴う転出に加え、婚姻による転出が影響してきます。

(6) 美里町と大崎市における人口移動の状況

本町の人口移動において、大きな影響を持つ大崎市との関係を見てみます。

初めに年代別、転出・転入別にその状況を表し、加えて転入超過の状況を見ます。(図18)

ア 大崎市への転入・転出の年代別状況

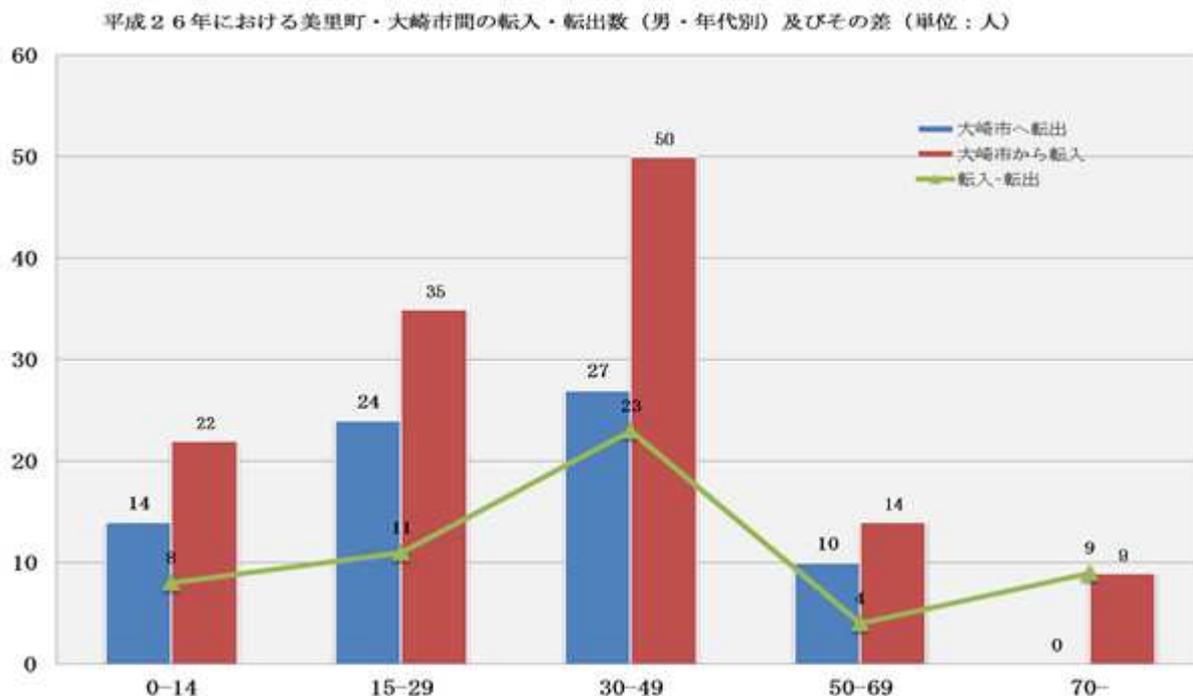
図18



大崎市を相手にすると、いずれの年代においても転入超過となっています。転入者数、転出者数及び転入超過がいずれも最大の年代は30歳から49歳までの年代であることが分かります。また、15歳から49歳までの間での人口移動が激しいことがグラフから分かります。

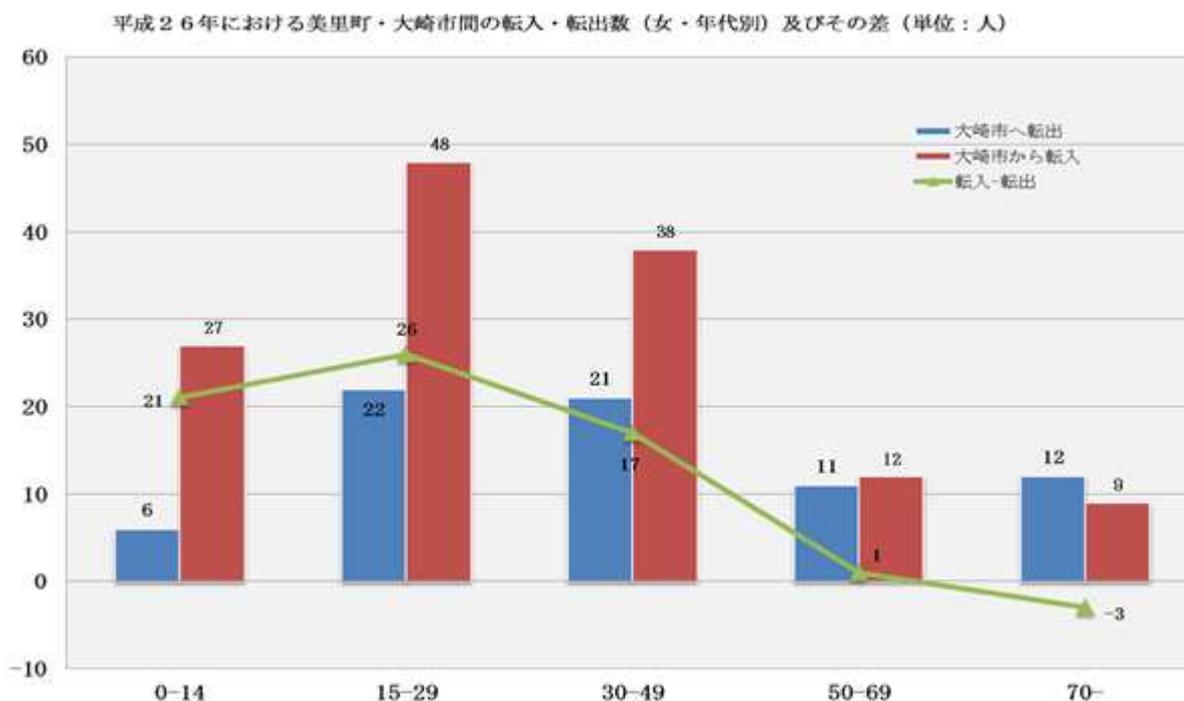
イ 大崎市への転入・転出の年代別状況（男女別）
次に男性に限定して同じ内容を見てください。（図19）

図19



男性について、全体の傾向とほぼ同様の傾向となっています。では、女性の場合を見てください。（図20）

図20



女性は15歳から29歳までの年代で転入超過が発生している点が特徴です。大崎市においては、小牛田と東北本線でつながる地域もあり、陸羽東線でつながる旧古川市街地もあります。さらには仙台駅と小牛田駅間の鹿島台、松山もあり、人口移動の要素は複雑になっていると考えられます。

(7) 美里町と仙台市における人口移動の状況

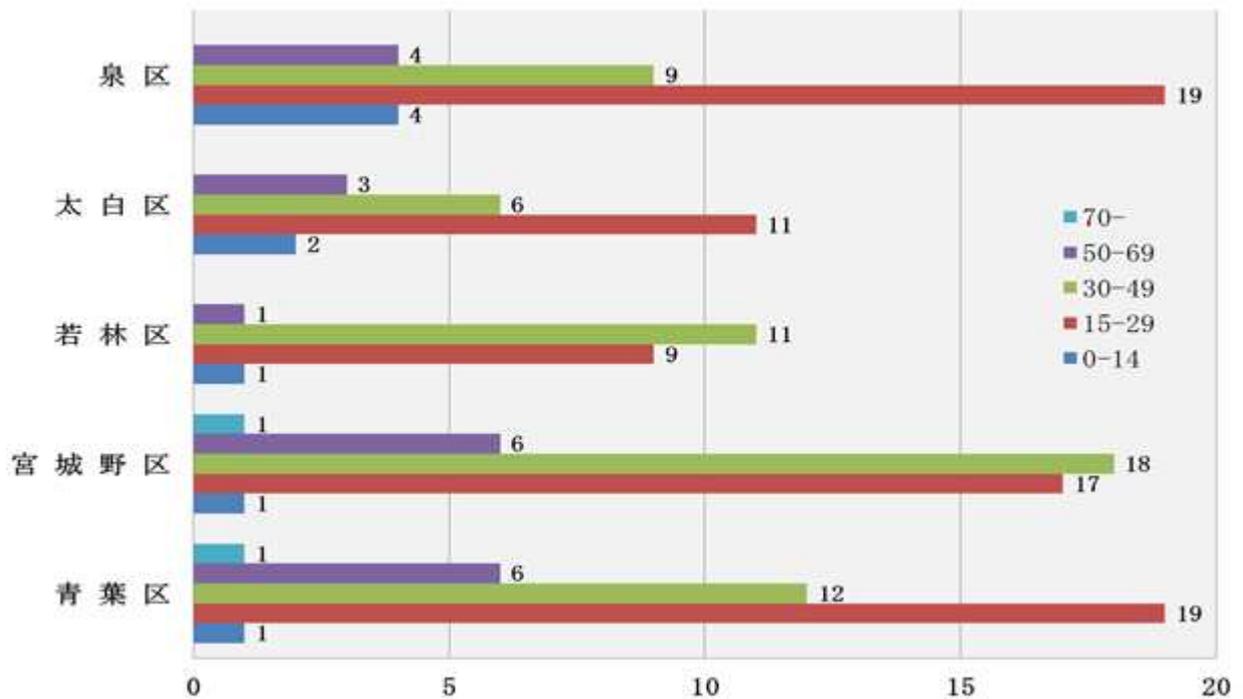
ア 仙台市の区ごとにおける移動の状況（転出）

大崎市とともに美里町の人口移動に大きな影響を持つ仙台市に関する内容を見てください。

はじめに本町から仙台市へ転出する方の転出先を見ます。(図21)

図21

平成26年における仙台市への転出者の内訳(年代別)(単位:人)



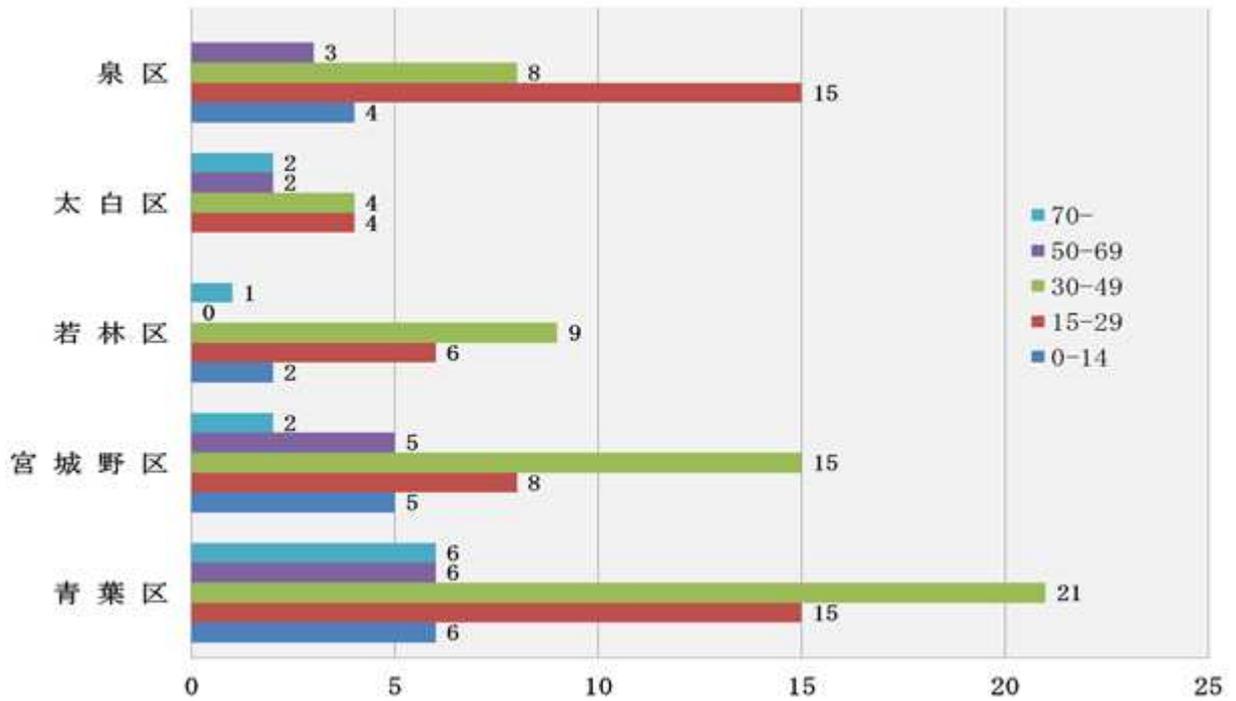
15歳から29歳までの年代の転出者が多いことがグラフから分かります。特に泉区への転出は15歳から29歳までの年代が他の年代に比べて著しく多いことが分かります。また、最大の転出先は宮城野区となっています。

イ 仙台市の区ごとにおける移動の状況（転入）

次に、転入の傾向を見てみます。（図 2 2）

図 2 2

平成 2 6 年における仙台市からの転入者の内訳（年代別）（単位：人）



最大の転入先は青葉区であり、70歳以上の転入者もいることが分かります。また、転入者の多くが30歳から49歳までの年代で、転出者に比べ、その年代層が広がっていることが分かります。

ウ 仙台市の区ごとの詳細

次に転出・転入の状況を年代別、性別、転出・転入別とその差を区ごとに表します。(図23、図24、図25、図26及び図27)

図23

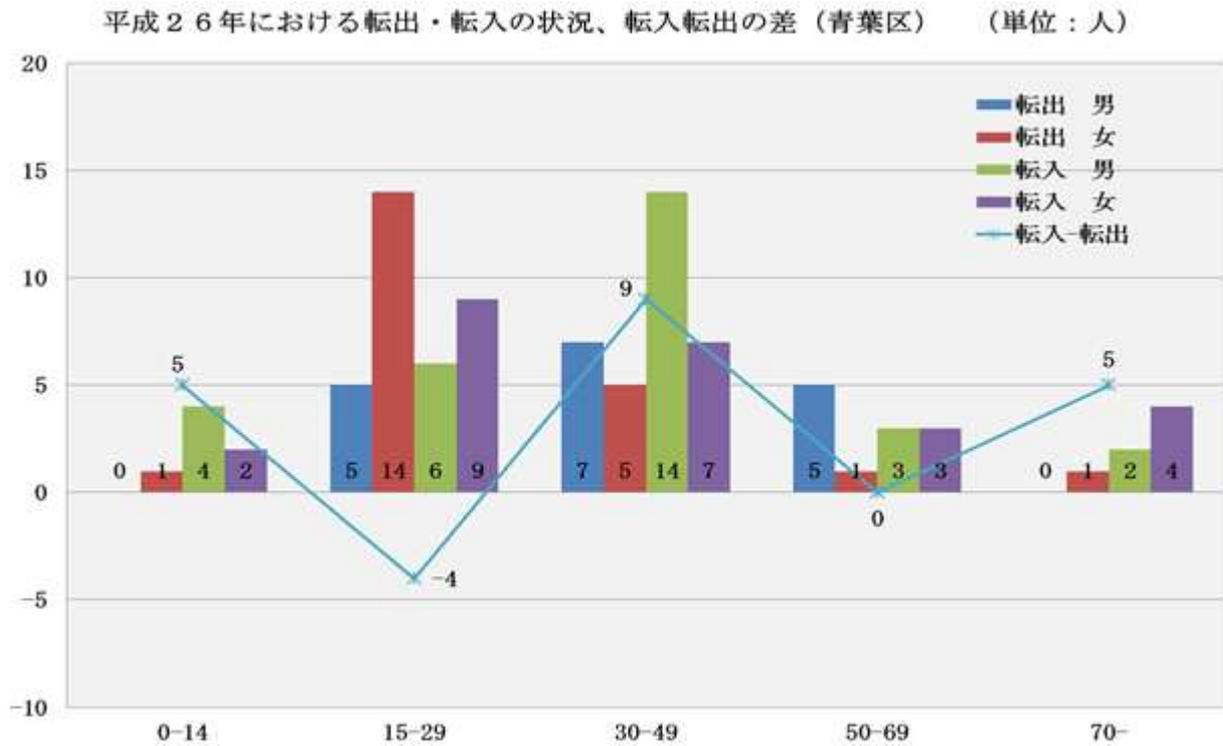


図24

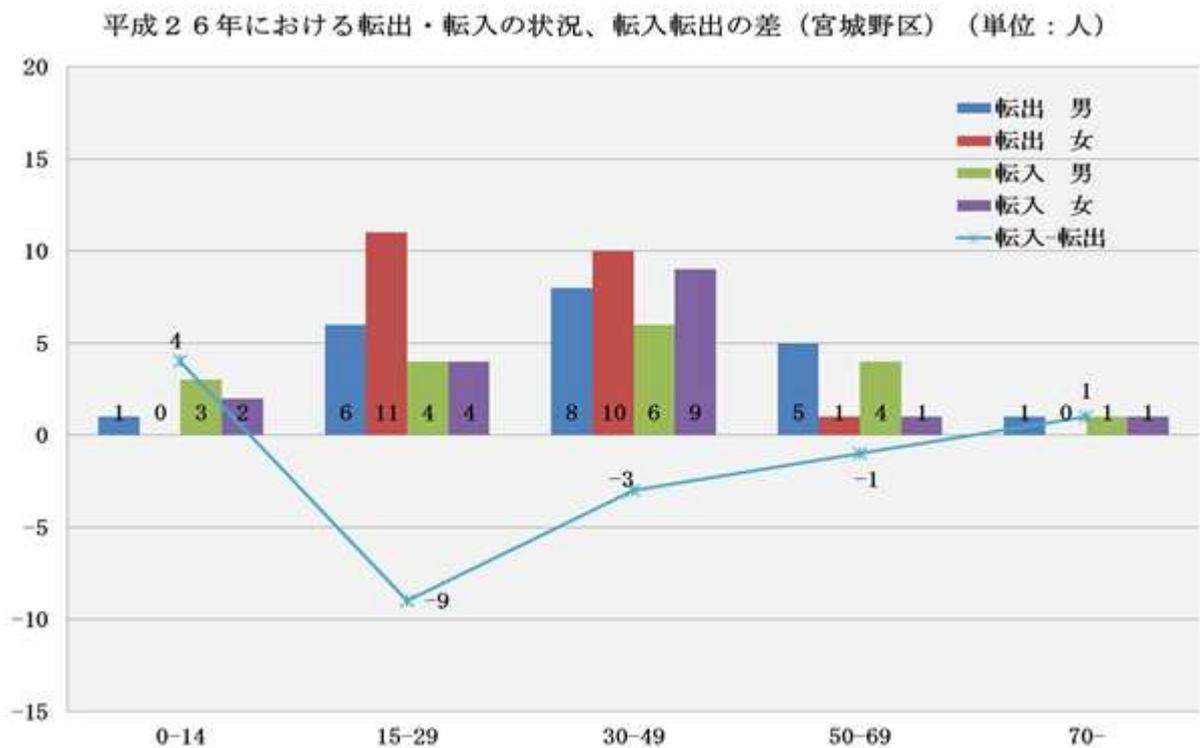


図 2 5

平成 2 6 年における転出・転入の状況、転入転出の差（若林区）（単位：人）

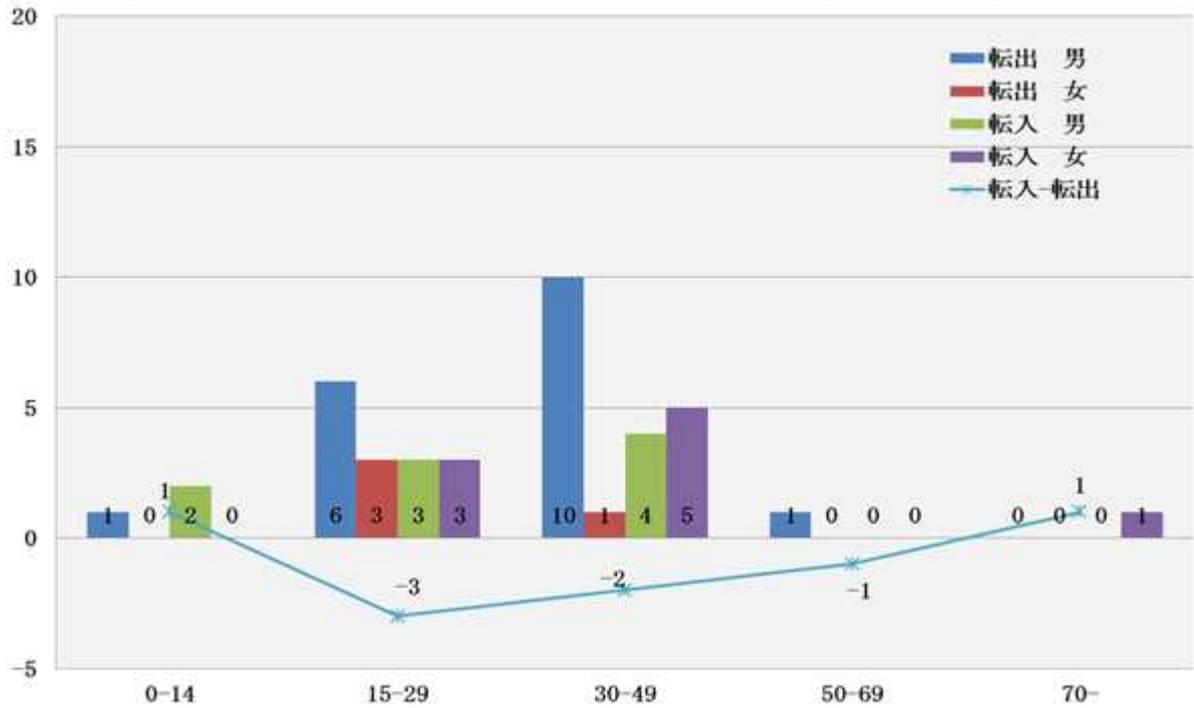


図 2 6

平成 2 6 年における転出・転入の状況、転入転出の差（太白区）（単位：人）

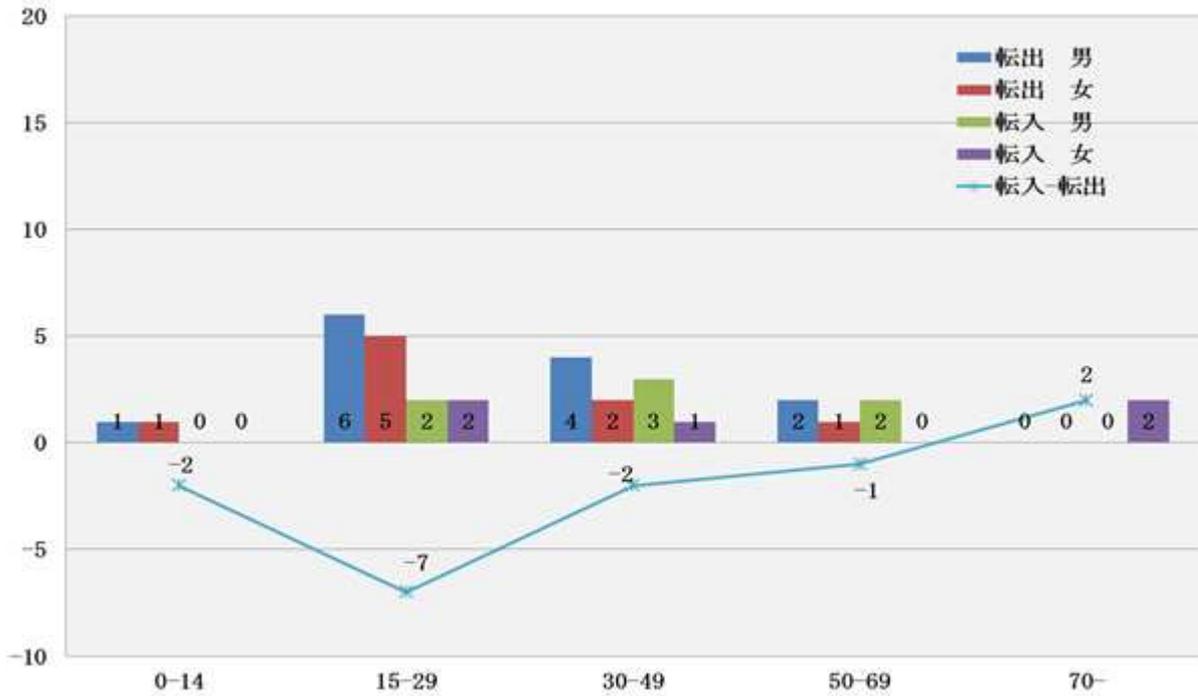
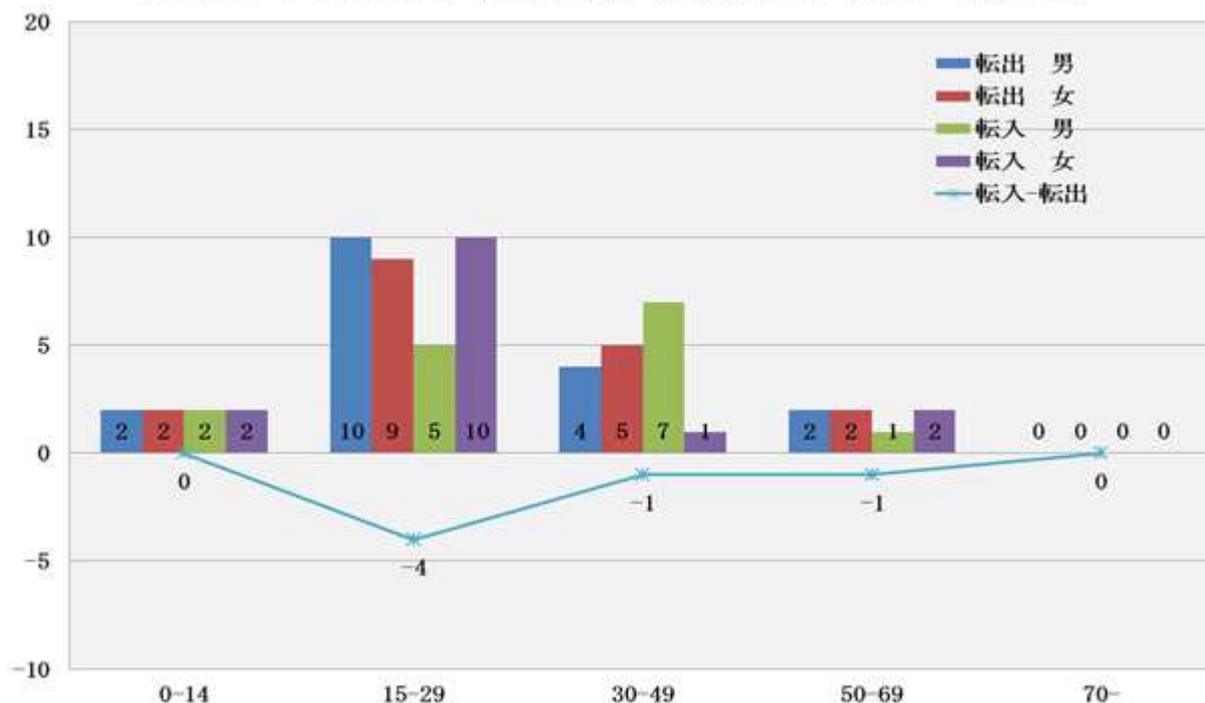


図 2 7

平成 2 6 年における転出・転入の状況、転入転出の差（泉区）（単位：人）



青葉区）15歳から29歳までの年代で転出超過（-4人）し、青葉区全体では転入超過（15人）しています。

宮城野区）転入超過は0歳から14歳までの年代（4人）及び70歳以上の年代（1人）であり、その他の年代はすべて転出超過しています。宮城野区全体では転出超過（-8人）です。

若林区）宮城野区同様、転入超過は0歳から14歳までの年代（1人）及び70歳以上の年代（1人）であり、その他の年代はすべて転出超過している。若林区全体では転出超過（-4人）です。

太白区）転入超過は70歳以上の年代のみ（2人）であり、その他の年代はすべて転出超過しています。太白区全体では転出超過（-12人）です。

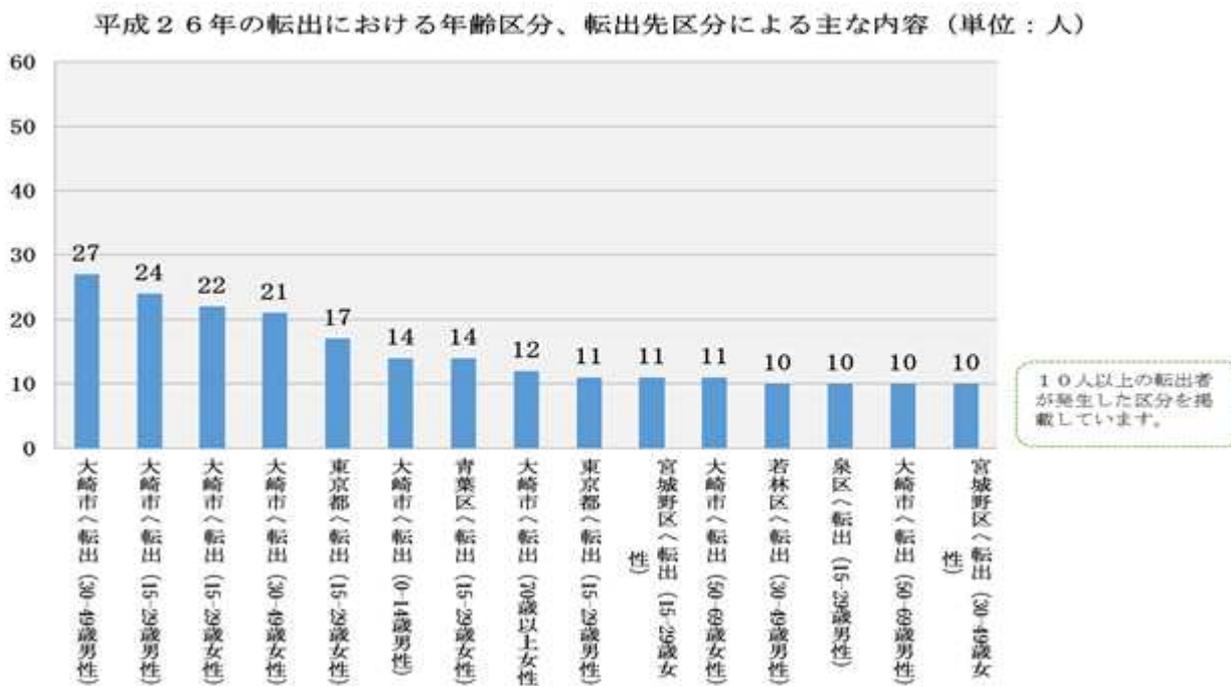
泉区）すべての年代の転入転出が均衡又は転出超過の状態です。泉区全体で-6人転出超過となりました。

(8) 平成26年における主な人口移動の内容

平成26年において10人以上の転出区分を転出先別・性別・年代別で多いほう順に並べます。
(図28)

ア 主な転出

図28

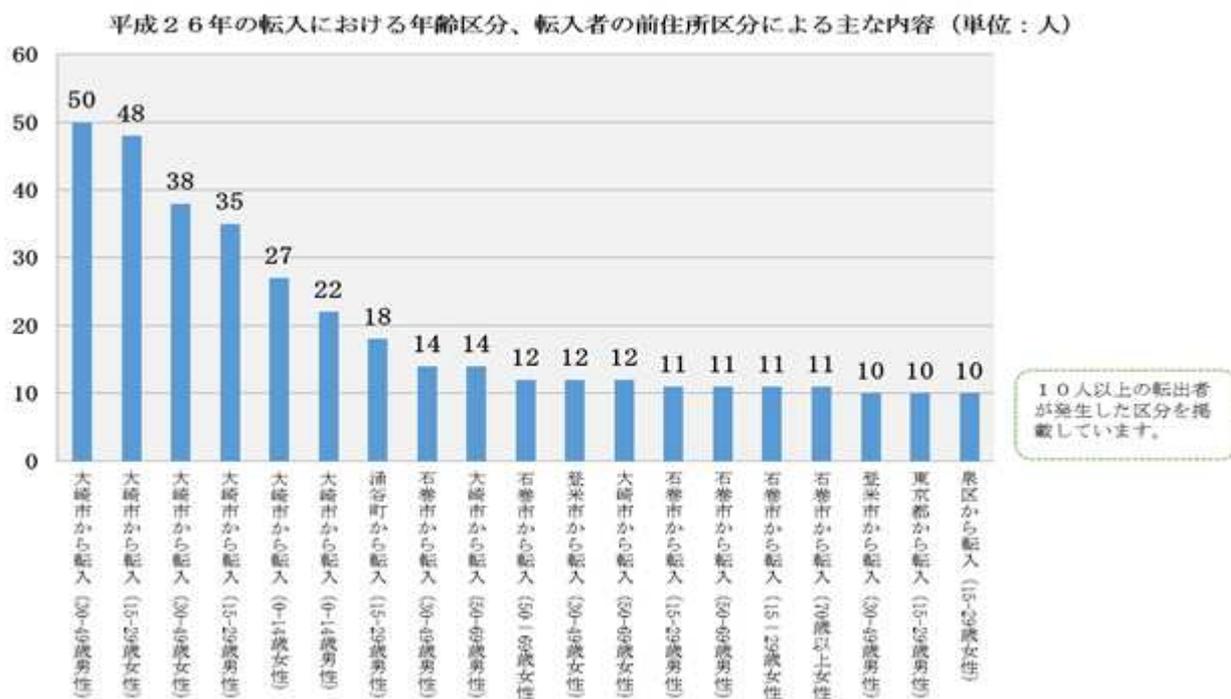


上位4つはいずれも大崎市への転出で男女の若者が中心となっていることが分かります。次いで、若い女性の東京都への転出が続きます。

イ 主な転入

同様に転入者の前住所別に見てみます。(図29)

図29



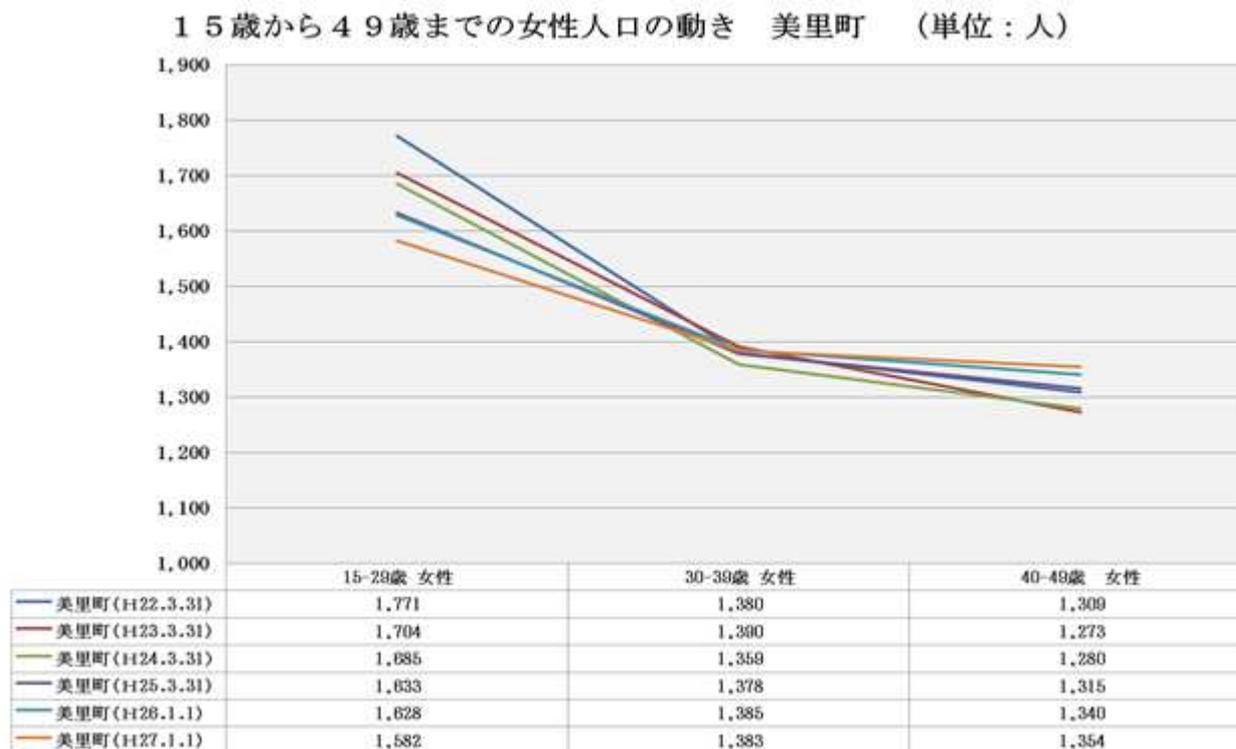
転入に関しては上位6つが大崎市からの転入となっています。そのあとに涌谷町、石巻市、登米市等からの転入が続きますが、その中でも石巻市からの転入の項目の多さが目立ちます。

(9) 女性人口の動き

少子化に直接、影響を及ぼす女性人口、その中でも15歳から49歳までの女性人口の推移を平成22年から平成27年まで見てみます。(図30)

ア 女性人口の推移

図30⁸



15歳から20歳までの年代を年単位で見ると、年々減少していることが分かります。また、15歳から49歳までの間に、年を重ねるごとに減少していたことが分かります。ななめ上に向かって「くの字」を描いています。

では、人口増加が著しいと言われる他の町の傾向と比較して見てみます。

⁸ 図30から図37までは民基本台帳の宮城県統計資料参考。平成25年以前は3月末の数値。集計方法変更により平成26年から1月1日現在の数値となりました。

イ 他の町との比較

ここでは利府町（図3 1）と富谷町（図3 2）を例とします。

図3 1

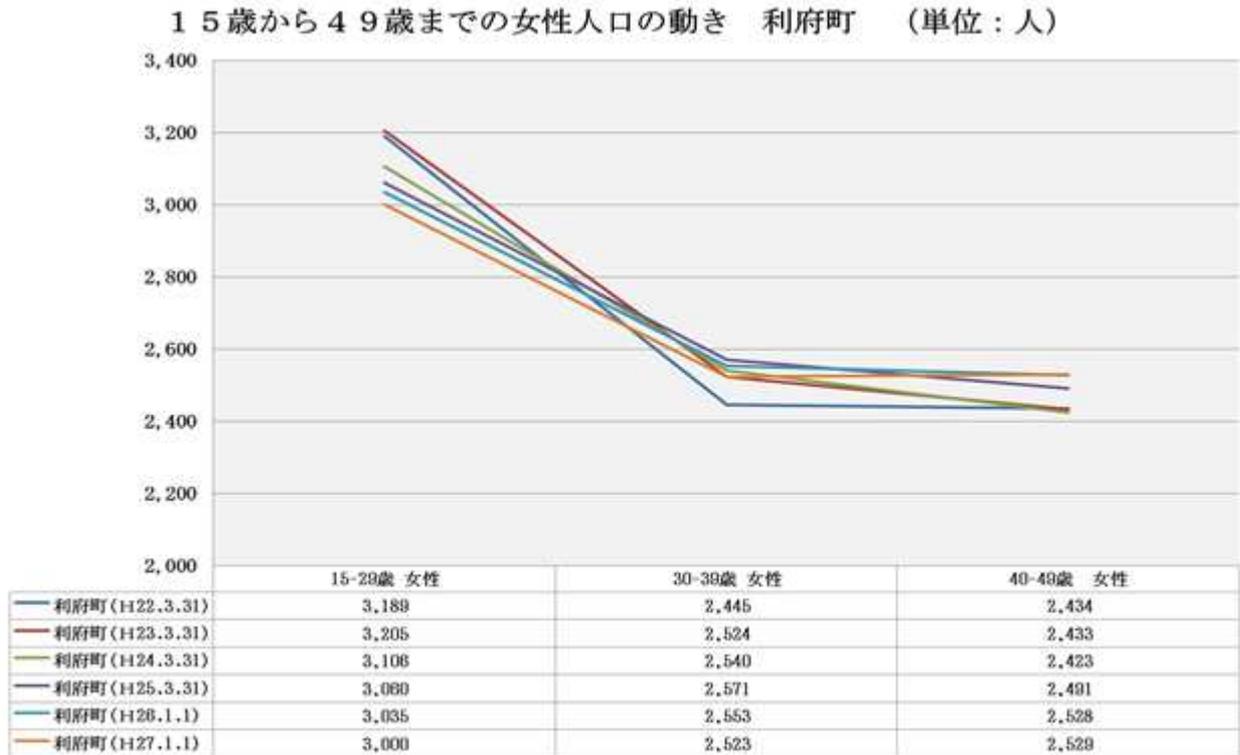
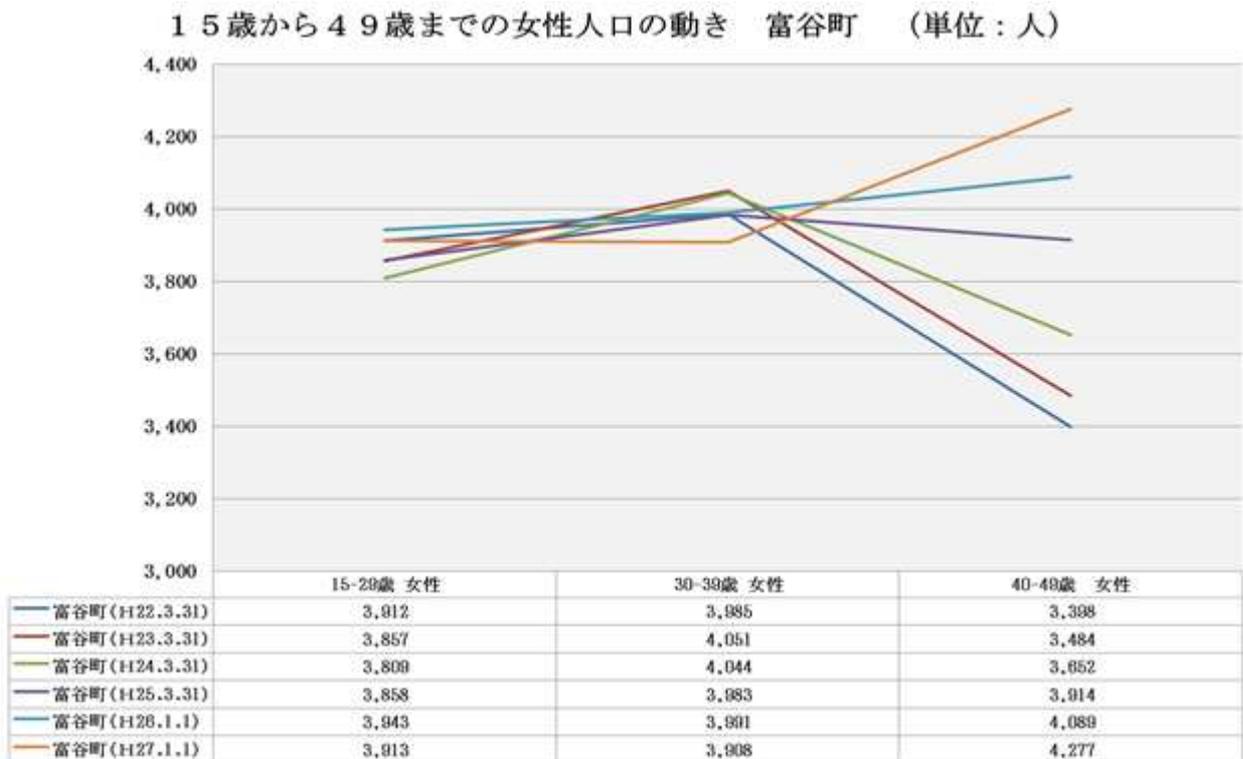


図3 2



利府町：美里町同様に15歳から29歳までの女性人口は以前に比べ、徐々に減ってきていることが分かります。

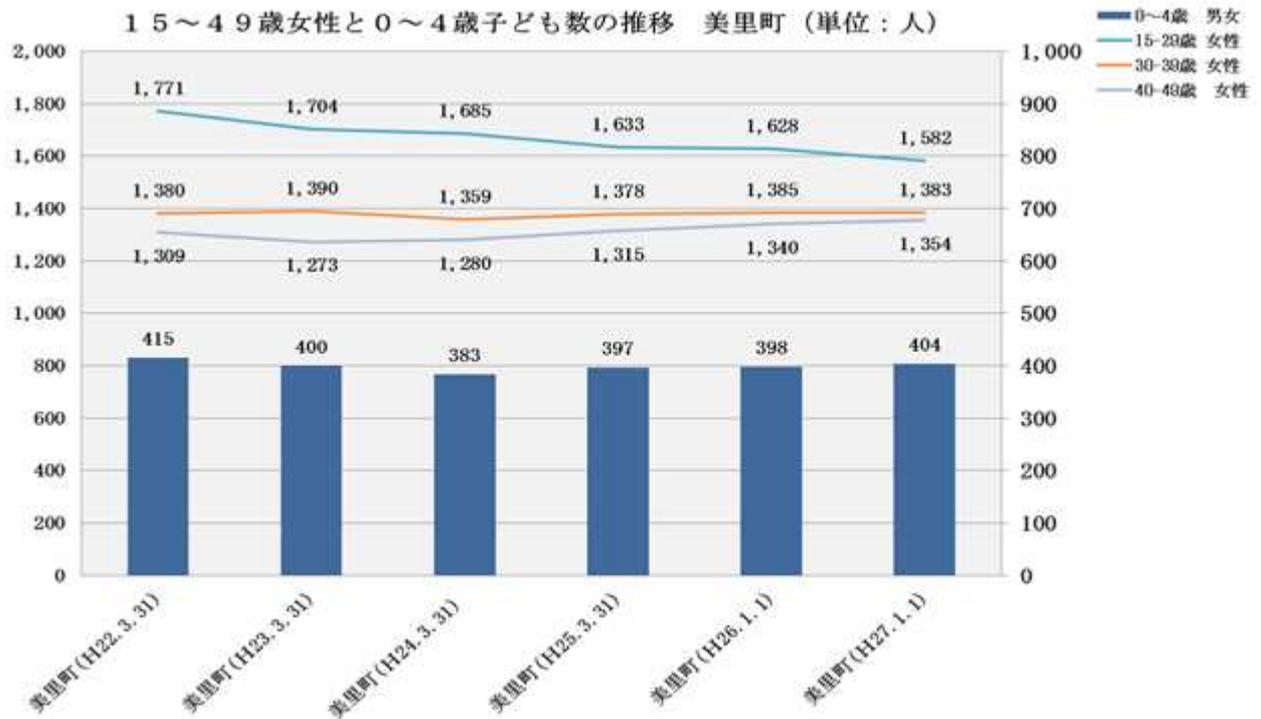
富谷町：15歳から29歳までの人口と30歳から39歳までの人口がほぼ同数又は増加という傾向が見られ、女性人口が大きく減少していないという特徴があります。また、40歳から49歳までの年代の女性は年を追って増加していることが、明らかに分かります。富谷町

のグラフのラインは美里町と利府町のラインとは異なっています。

ウ 女性人口と子どもの数

15歳から49歳までの人口と0から4歳までの子どもの数の推移をみます。(図34)

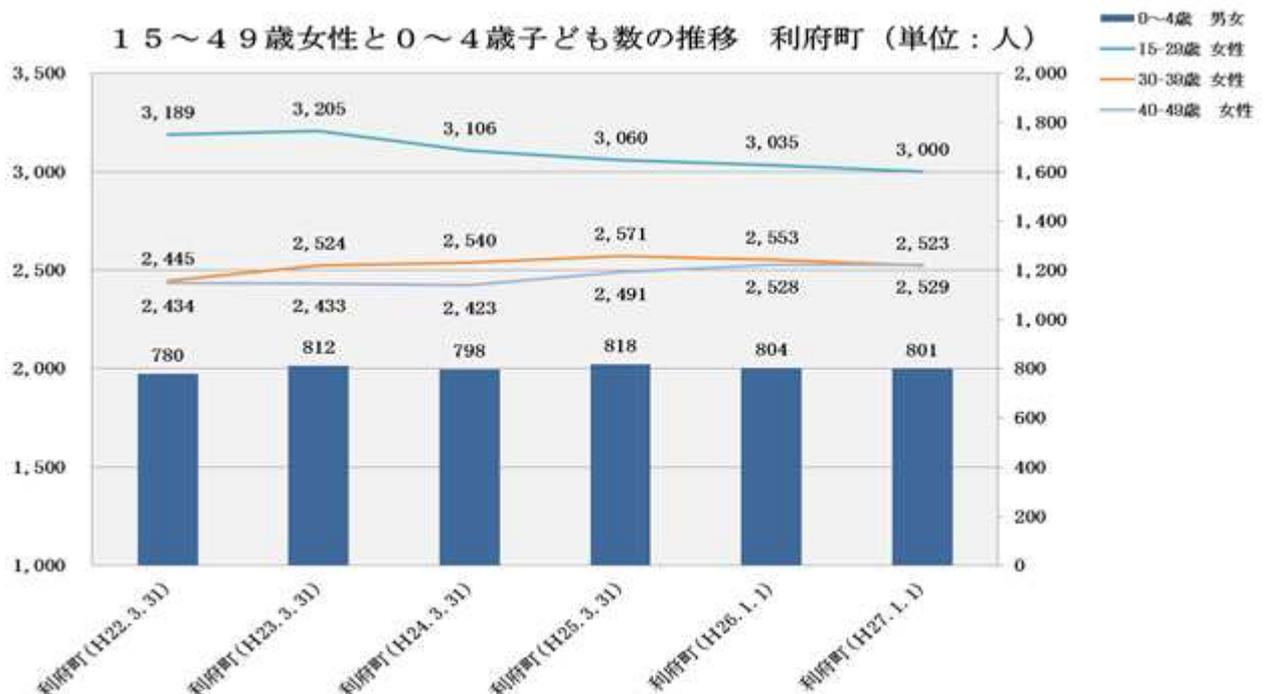
図34



美里町の0から4歳までの子どもの数は平成22年が最大で415人、最少が平成24年の383人となっています。また、30歳から39歳の女性も平成24年に最少の1,359人となっています。さらに、15歳から29歳までの女性は、平成22年時の1,771人に比べ、平成27年では1,582人と189人も減少しています。平成22年を100とすると平成27年は89.3となります。

それでは、利府町(図35)と富谷町(図36)を例に子どもの数と女性数をみます。

図35



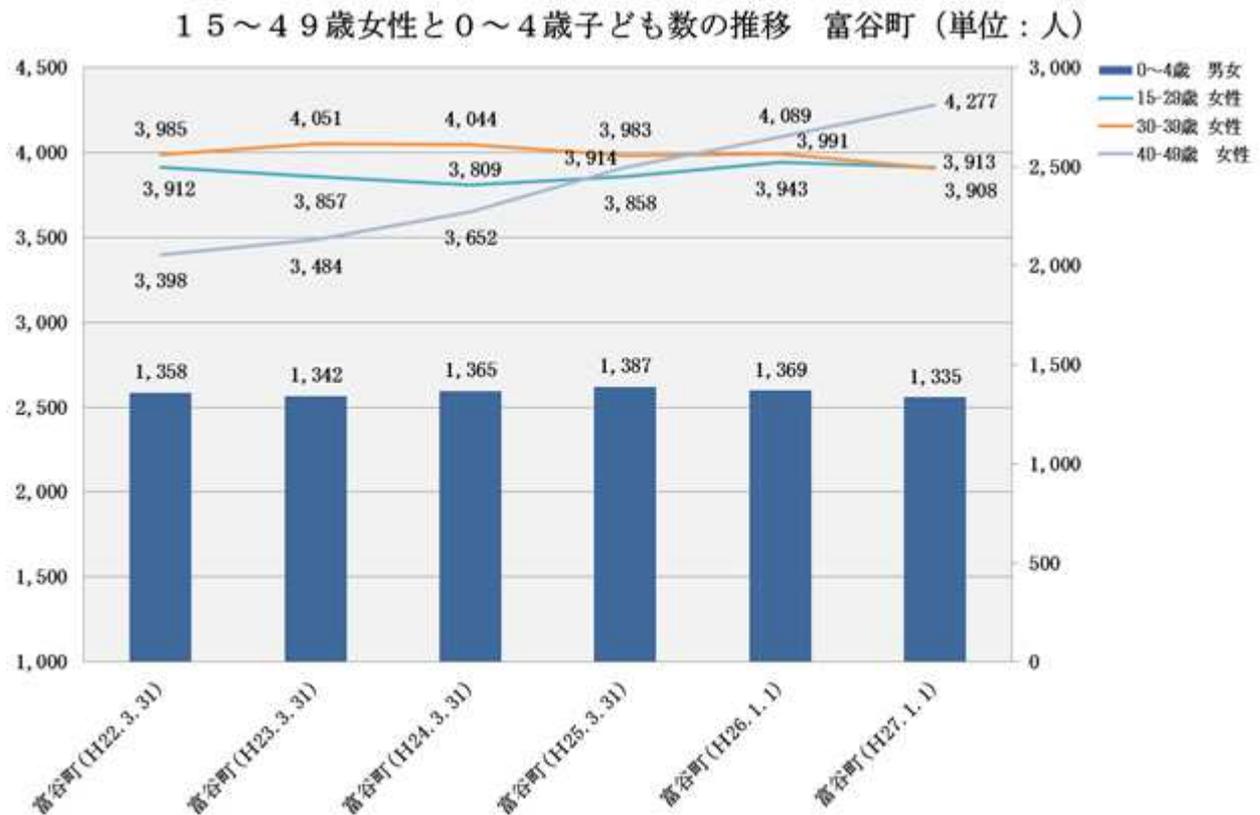
利府町の0から4歳までの子どもの数は平成25年が最大で818人、最少が平成22年の780人となっています。

30歳から39歳の女性数が最少である平成22年が子ども数も最少であり、30歳から39歳までの女性数が最大である平成25年が子ども数も最大となっています。

グラフを見ると利府町においても15歳から29歳までの女性数が減少していることが分かります。平成22年時の3,189人に比べ、平成27年では3,000人と189人も減少し、平成22年を100とすると平成27年は94.1となっています。

次に富谷町を見てみます。

図36



富谷町は、美里町及び利府町に比べ、女性数を示す線グラフの動きが激しく、人口動態が活発であるということが分かります。

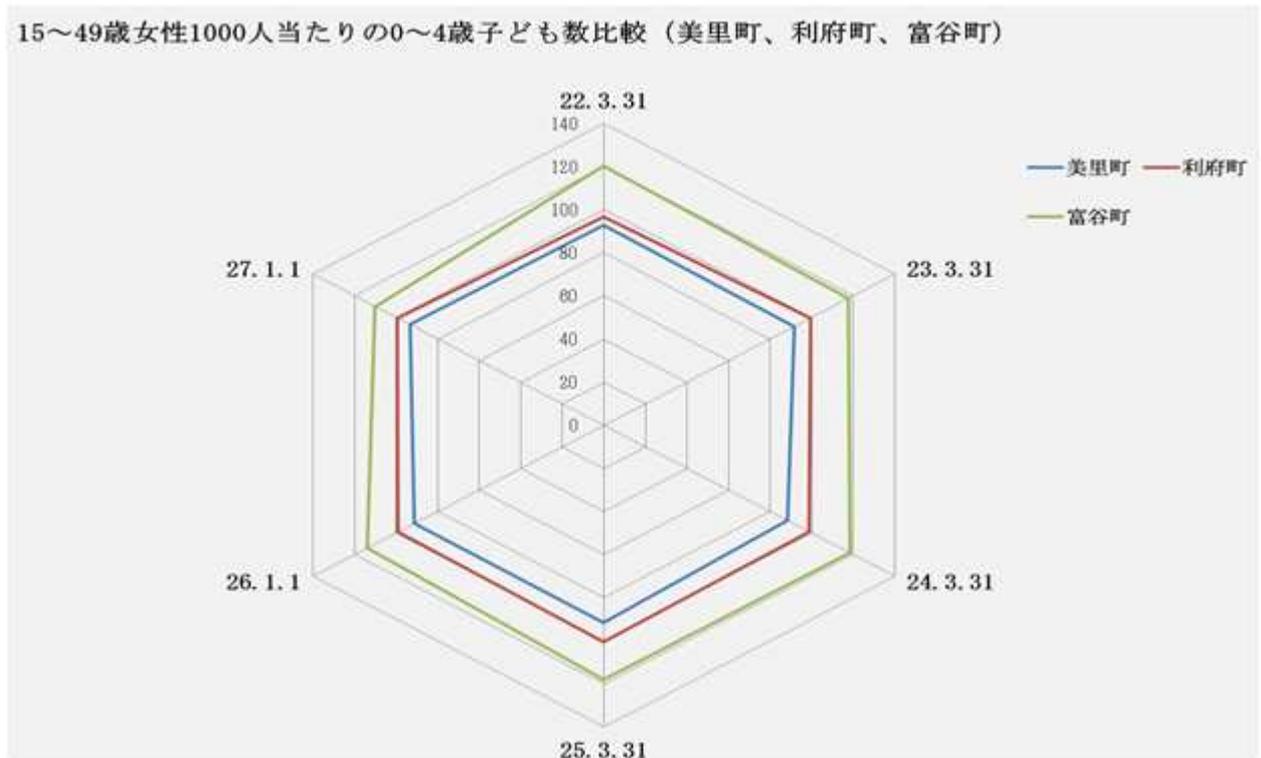
その内容を見てみると、富谷町の0から4歳までの子どもの数は平成25年が最大で1,387人、最少が平成23年の1,342人となっています。

40歳から49歳までの女性数は平成22年からこれまで右肩上がりであり平成22年を100とすると平成27年では126となっています。

美里町及び利府町で落ち込みが見られた15歳から29歳までの人口は平成22年を100とすると99.9と横ばいであり、30歳から39歳の女性数についても平成22年を100とすると平成27年では98.2とほぼ落ち込みが見られないことが特徴です。

では、女性1,000人当たりの子どもの数を美里町、利府町及び富谷町で比較して見てみます。(図37)

図 3 7



グラフの頂点を平成22年とし、時計まわりに平成23年、平成24年と順に平成27年まで表しました。また、グラフの中心から離れば離れるほど15歳から49歳までの女性1,000人当たりの子どもの数が多いことを表し、中心に近づくほどその数が小さいことを表します。

平成22年から平成27年までのいずれの時期においても富谷町がその数値が高く（多く）、いずれの時期も美里町の数値が低い（少ない）ことが分かります。

同年代の女性数1,000人当たりの子どもの数による比較であることから、各自治体における子どもを持つ意識、子どもを産める又は子育ての環境の充実の度合いが図れるものです。よって、美里町、利府町及び富谷町を比較すると、現在のところ富谷町が子どもを持ち、育てる環境が最も整っていると判断することができます。

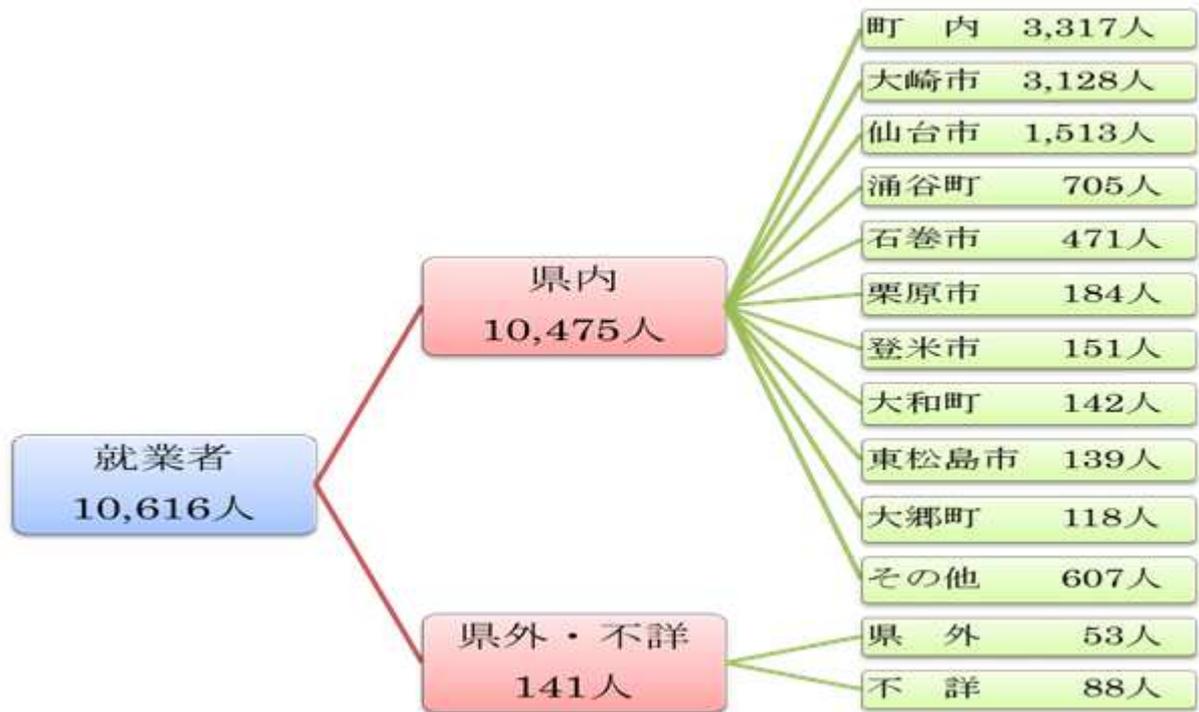
15歳から49歳までの女性の移住・定住を図り、単にその数を増やしても少子化対策にはつながらず、女性の妊娠・主産・子育ての切れ目のない支援策を充実することで、結果的に上記グラフの数値も向上し、少子化対策、人口増等につながります。

(10) 就業者の動きについて

ア 美里町の住民の就業場所

美里町の住民のうち就業している者は、平成22年国勢調査の結果によると、10,616人であり、その就業場所は次のとおりでした。(図38)

図 3 8⁹



就業者の98.7%にあたる10,475人が県内で勤め、そのうち31.7%(3,317人)が町内で就業しています。しかし、大崎市で就業している方も29.9%(3,128人)ととても近い数値となっています。県内で働く方の61.5%(6,445人)が町内と大崎市で占めています。次いで仙台市となりますが、その割合は14.4%(1,513人)と一気に数値が下がります。

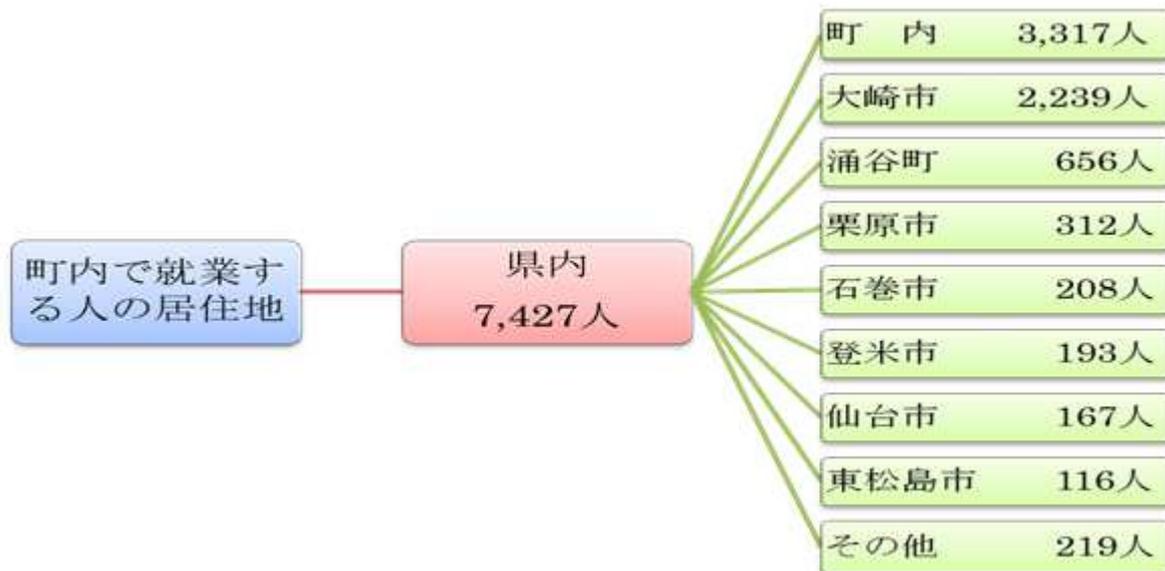
⁹ 図 3 8 から図 4 8 まで、平成 2 2 年国勢調査による数値

イ 美里町内で就業する人の居住地

美里町で就業している方の居住地の状況を見えます。(図39)

美里町で就業している者は、平成22年国勢調査の結果によると7,427人であり、その就業者の居住地は次のとおりでした。(図39)

図39



就業者の44.7%にあたる3,317人が町内に住み、大崎市から就業している方も30.1% (2,239人) いることが分かります。美里町で働く方の74.8%は町内居住、大崎市の住民で占められています。

美里町から県内の他の市町村で就業される方は7,158人(図38)で、県内の他の市町村から美里町に来られる方は4,110人(図39)となり、就業者は他の市町村に流出していると言えます。

工 産業別の就業場所

では、就業者を産業別・男女別・就業先別に割合をみます。(図4 1、図4 2及び図4 3)

図4 1

就業の状況【第一次産業】(就業先別・男女別)

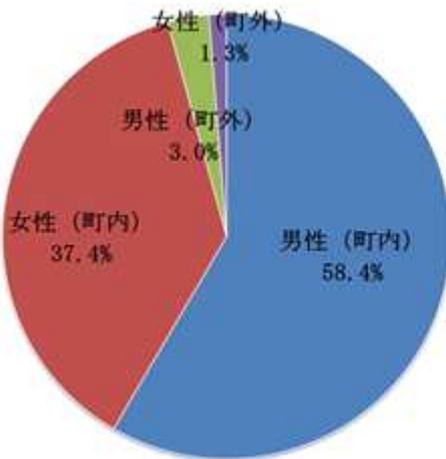


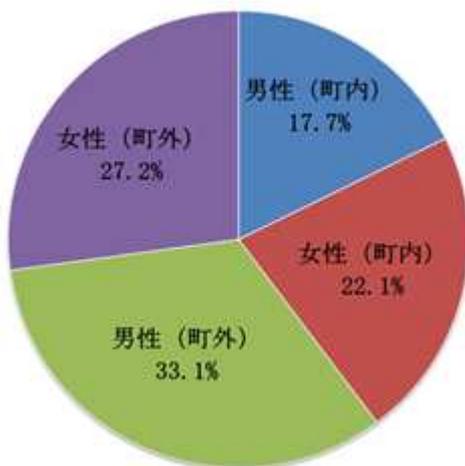
図4 2

就業の状況【第二次産業】(就業先別・男女別)



図4 3

就業の状況【第三次産業】(就業先別・男女別)



第1次産業：町内での就業が全体の95.8%を占めています。女性の就業が37%強です。

第2次産業：男性が全体の70.7%を占めています。町内での就業が28.7%にとどまっている。

第3次産業：町内約40%、町外約60%と半分以上が町外で就業しています。

オ 就業スタイルの男女別比較

就業スタイルを見比べてみます。(図44・図45)

図44

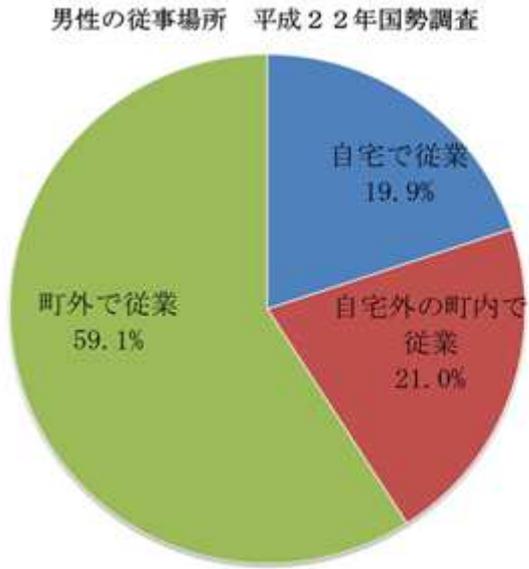
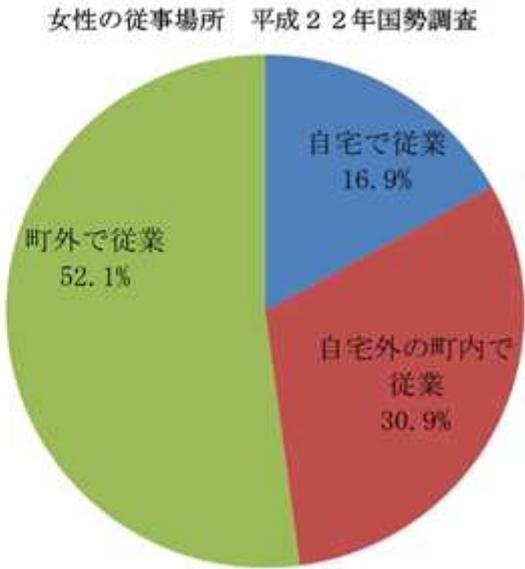


図45



男性と女性とも町外で就業する方はほぼ同様ですが、町内のどこで仕事をするかという点を見ると、女性は「町内で、しかし家以外の場所」が多く、男性は「自宅で」という傾向が見られます。

カ 業種別による就業場所

自宅で仕事、自宅以外で仕事又は町外で仕事の状況を仕事・業務別に見てみます。(図46、図47及び図48)

図46

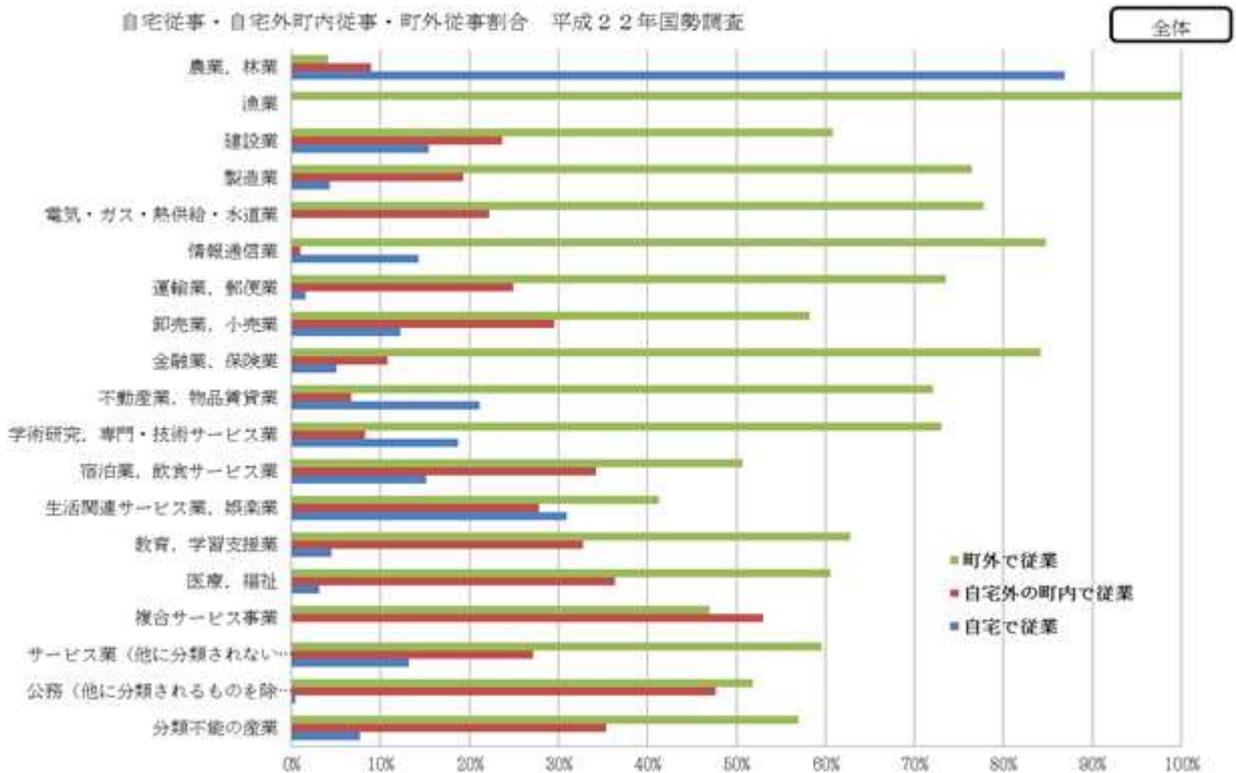


図 4 7

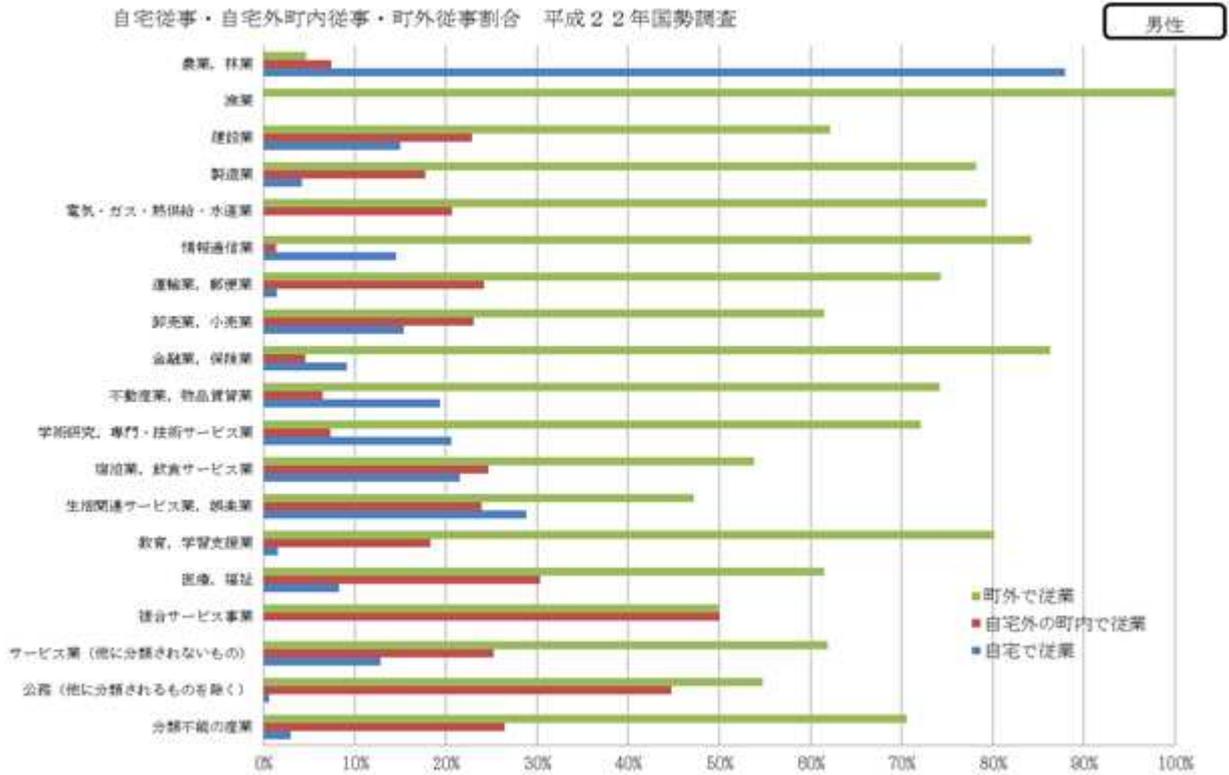
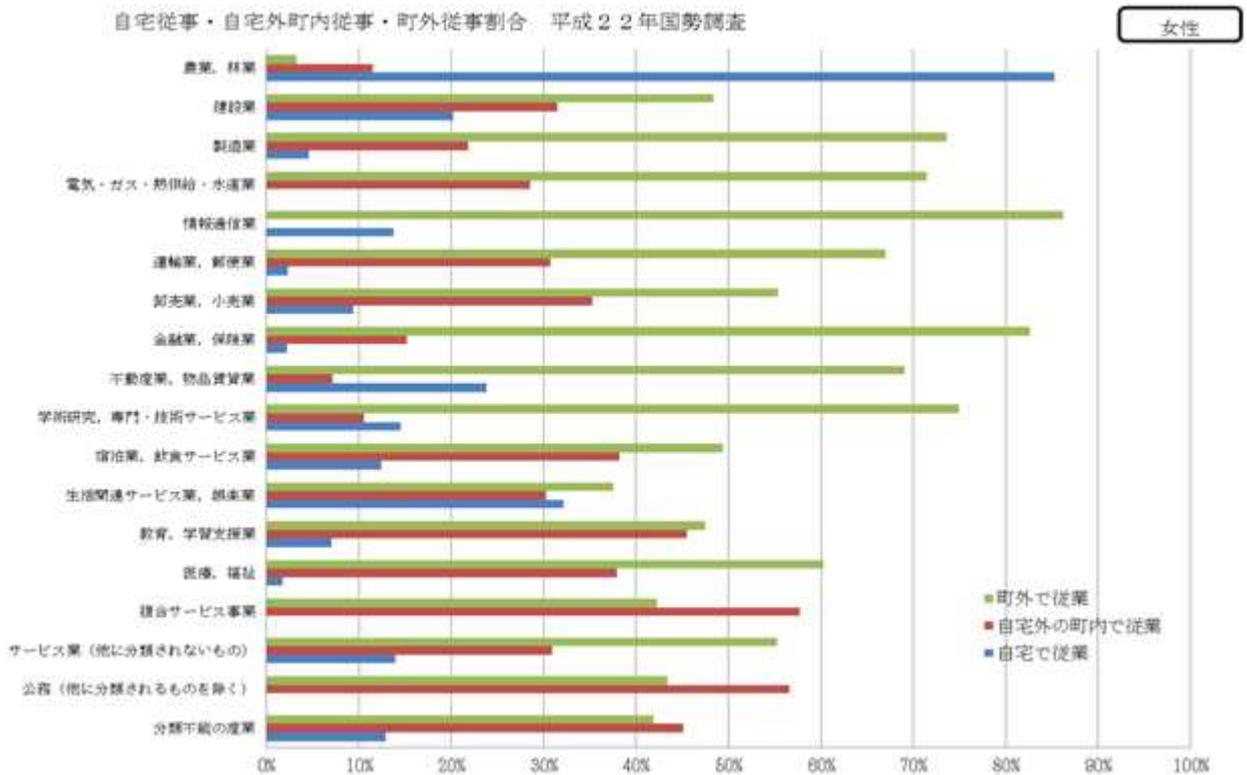


図 4 8



男性と女性に大きな違いは見られませんが、その中でも男性の「町外の教育、学習支援業」、「自宅での金融業、保険業」が女性よりその割合が高く、女性の「自宅外での卸売業、小売業」、「町外での不動産業、物品賃貸業」、「自宅外での宿泊業、飲食サービス業」がその割合が高いと言えます。

5 美里町の将来推計人口と目標人口について

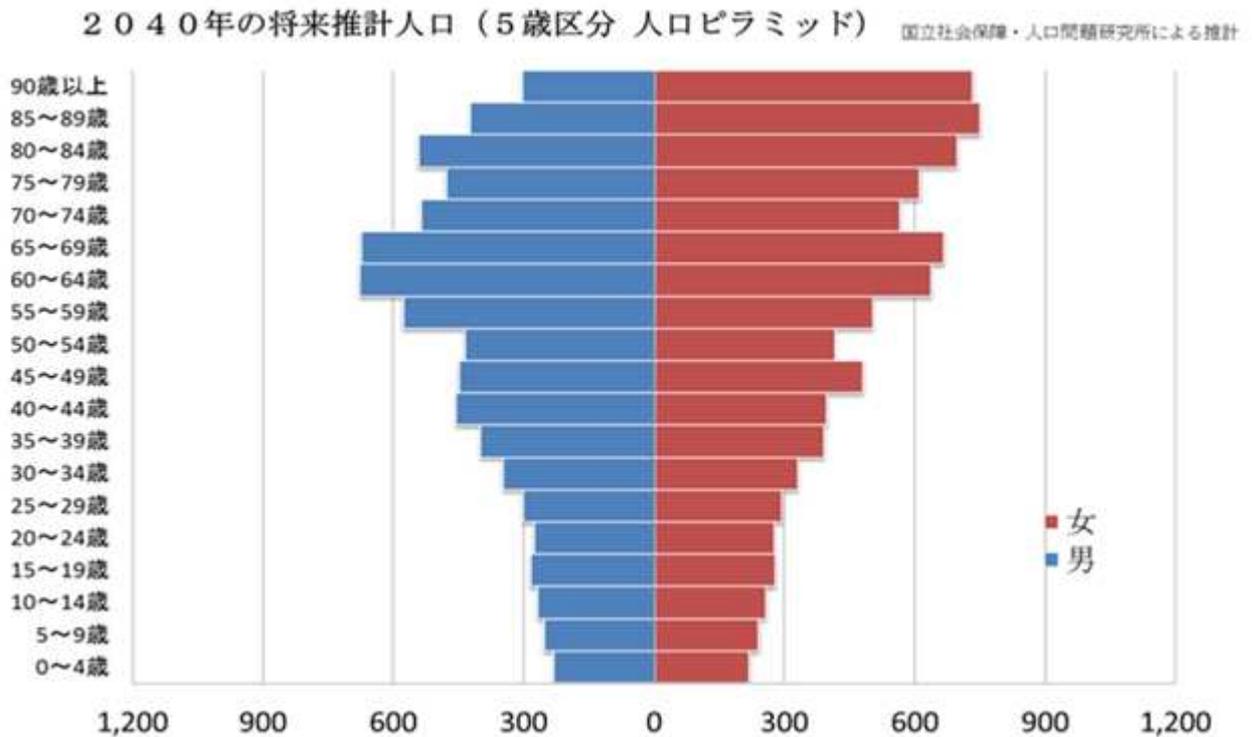
(1) 国による推計人口

国の機関である国立社会保障・人口問題研究所は、平成25年3月に本町の将来にわたる推計人口を示しています。(図49・図50)

図49



図50



この推計によれば、美里町の平成22年国勢調査人口25,190人が、30年後の平成52年には16,661人とその数8,529人減少するとされました。これは住民の3人に1人がいなくなるという規模の減少になります。

人口減少については真摯に受け止め、住民皆でその危機感を共有する必要があります。

(2) 町による推計人口及び目標人口

町では平成27年国勢調査の速報値(平成28年1月公表)を受け、推計人口を作成しました。また、推計人口も基に今後の目標人口を併せて設定しました。(図5.1・図5.2)

図5.1



A) 社人研(H25.3月推計)

国立社会保障・人口問題研究所による平成25年3月における推計

B) 町推計(現状維持)

平成27年国勢調査による速報値を用い、現在の合計特殊出生率及び社会移動による推計

C) 町目標(出生率向上、社会増減なし)

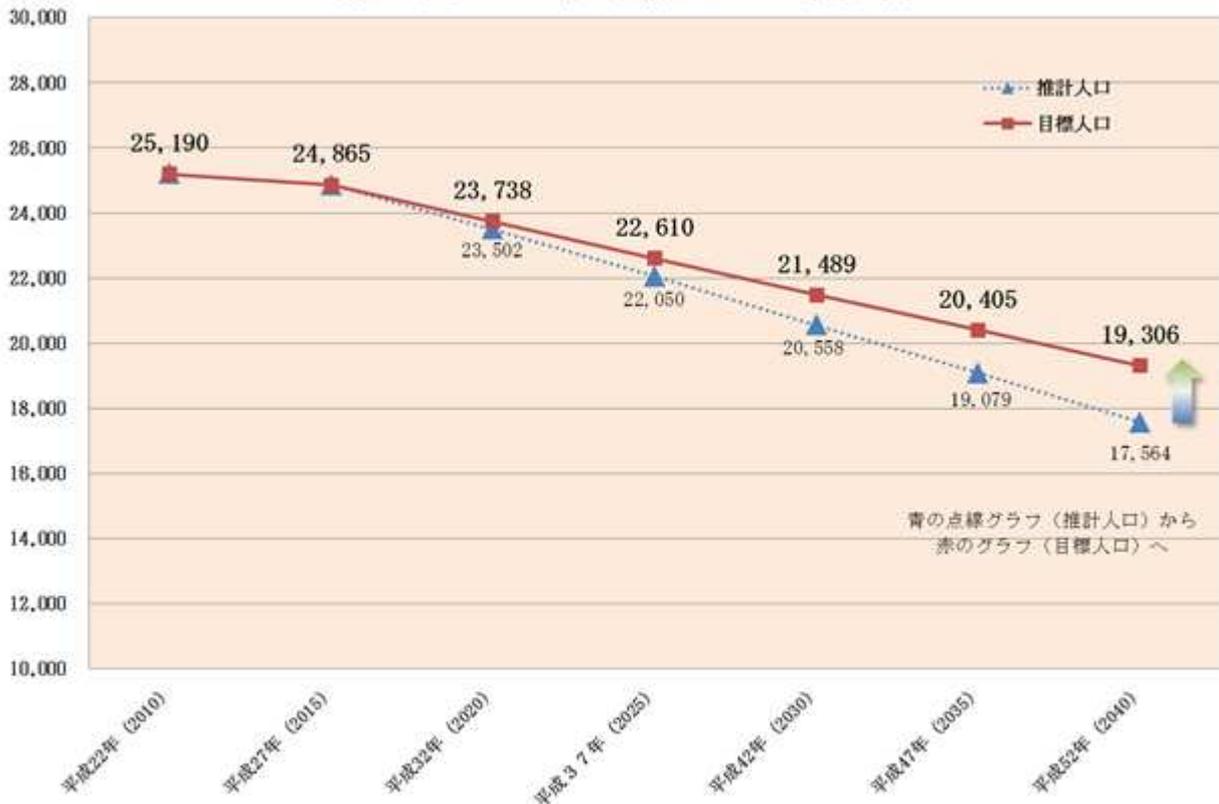
平成27年国勢調査による速報値を用い、目指す合計特殊出生率及び社会移動による社会減を無くした推計

2040年において最大のCによる目標人口(19,306人)と最少のAによる推計人口の差は2,645人となりました。

美里町総合計画・美里町総合戦略における推計人口、目標人口は次のとおりです。

図5.2

平成52年（2040年）の目標人口について（単位：人）



平成52年（2040年）の推計人口は17,564人であり、その推計人口を上回り、目標人口（19,306人）を実現するための要素として、下記の2つの目標数値が実現することが必要です。

【自然的要因】 平成52年（2040年）の合計特殊出生率 1.8
 平成52年（2040年）までに合計特殊出生率を1.8まで回復すること
 そして、

【社会的要因】 転入者数 転出者数
 （平成28年（2016年）から平成52年（2040年）まで）
 平成28年（2016年）から平成52年（2040年）までの期間における転入者の数を転出者の数以上すること

6 今後の課題、展望及び方向性

これまでの分析を総括し、今後の課題と方向性を整理します。

1. 高齢化 急速な高齢化に対し逆らうことはできません。高齢者の方々が生き生きと暮らせるまちを目指すものです。
2. 少子化 少子化の進行は将来の町の存続に直接影響を及ぼします。よって、まずは若い女性の移住・定住を促進し、結婚し、働きながら妊娠、出産、そして子育てできるまち、また、「二人目の壁」を突破するまちの実現を目指すものです。
3. 雇用 大小を問わず、町内で働く場の確保、また、他の地域から就業される人を増やし、賑わいのあるまちを目指すものです。